

ビルダーボーゲンにおける人種問題

宇佐美 幸 彦

はじめに

ビルダーボーゲンは1830年頃から20世紀初頭までドイツで大量に発行された一枚刷り印刷物という大衆的メディアである。その主要な発行所は、グスタフ・キューン社 (Gustav Kühn, 以下 GK と略記する)、エーミケ・ウント・リームシュナイダー社 (Oemigke & Riemschneider, 以下 O&R と略記) (以上 2 社の所在地はノイルピーン)、ブラウン・ウント・シュナイダー社 (Braun & Schneider, 以下 B&S と略記、所在地ミュンヘン)、グスタフ・ヴァイゼ社 (Gustav Weise, 以下 GW と略記、所在地シュトゥットガルト) である。これらの主要な 4 社の発行したビルダーボーゲン (以下ボーゲンと略記することもある) で人種的な問題がどのように扱われているかを検討したい。

ボーゲンが盛んに発行されていた1830年から1915年という時期はドイツの歴史にとって大きな変化があった時期である。政治的には、ウィーン体制の下での領邦国家分立状態から、プロイセンが軍国主義国家として台頭し、第二帝政として統一国家が成立し、その後、第一次世界大戦へと突入する時期である。この間にプロイセン (そしてドイツ) はデンマーク戦争、普奥戦争、普仏戦争、第一次世界大戦と戦争を繰り返した。経済的には、小さな領邦国家という経済圏から、関税同盟や統一国家の形成によって近代的な資本主義発展を遂げ、植民地支配・外国への経済進出という帝国主義的段階に到達した。写真技術がまだ発達していない時期に、ボーゲンは絵入りの印刷物として、戦争や革命など事件報道や大衆的な娯楽として、

国民の意識形成に重要な役割を果たした。その中で人種問題がどのように扱われているかを具体的に検証していきたい。戦争報道においては、多くの場合、自国軍の輝かしい勝利を報じるなど、一方的な報道姿勢がほとんどであるが、デンマーク、オーストリア、フランスなどの敵国の民族については、人種としてはとくに問題とされていないので、本論で述べる人種問題は、ヨーロッパ以外の人種がボーゲンに登場した場合を対象にしたい。

ここで扱うボーゲンは多様である。その発行時期はほぼ一世紀近くにわたり、内容的にも時事報道的な作品から、外国事情を知らせる教育的な作品、フィクション性の高い娯楽的な作品など、さまざまなので、歴史的な発展を踏まえ、次のように章分けして論じることとする。すなわち(1)19世紀中葉のビルダーボーゲンにおける人種問題（クリミア戦争の時期まで）、(2)アフリカへの植民地進出とビルダーボーゲン、(3)植民地時代の人種問題が表れている娯楽的ビルダーボーゲン、である。

第1章 19世紀中葉のビルダーボーゲンにおける人種問題 (クリミア戦争の時期まで)

(1) 「マルティニクにおける黒人の革命」

B&S社とGW社は19世紀半ば以降になってからビルダーボーゲン発行に参入したので、19世紀中葉まではノイルピーン（GK社とO&R社）のボーゲンが研究対象となる。ノイルピーンはベルリンの北西にある小さな町で、ボーゲンの内容は、小市民の家庭生活を大事にするビーダーマイアの考えが支配しているケースがほとんどであって、初期（19世紀前半）においては恋愛や家庭の幸福を描いたり、キリスト教的な教えを示したりする作品が多く、エキゾチックな外国に目を向ける作品はほとんど見当たらない。ただしGK社の経営者グスタフ・キューンは国民教育を使命と考える啓蒙主義的な人物であったようで、わずかな作品ではあるが、他の発行所に先駆けてヨーロッパ以外の世界をボーゲンに取り入れている。

GK社は1848-49年にかけて、シリーズで時事問題を扱ったボーゲンを発

行している。これは1848年2月のパリにおける「二月革命」とそれに続くベルリンでの「三月革命」、デンマークとの戦争など立て続けに大きな政治事件が起こり、これらの事件を絵入りで報道したものである。デンマークなど外国との戦争においてはGK社の報道姿勢はプロイセン軍の立場を代弁しているもので、軍国主義の宣伝物となっているが、三月革命の報道では、「自由、平等」という市民の主張にも理解を示しており、ある程度リベラルな報道が残されている。また写真による記録がない三月革命時のベルリンの町の様子などが視覚的に示されているという点で、貴重な価値がある報道記事だと評価することができよう。この「奇怪な年一八四八年」シリーズに、突然、ヨーロッパから遠く離れた世界が、しかも黒人の反乱事件が登場する。このシリーズの第32号は「マルティニクにおける黒人の革命」(Neger-Revolution auf Martinique, NRGK-02103, 1848年)¹と題されている。

マルティニクはヨーロッパから大西洋を隔てたカリブ海にある島で、現在でもフランスの海外県を構成している古くからのフランス植民地である。18世紀末には約6万人の黒人奴隷がいて、フランス革命ののち1794年に行った奴隷制の廃止が国民公会によって決議されたが、1802年にナポレオンによって奴隷制が復活されていた。1848年フランス二月革命の影響を受けて、黒人奴隷たちが奴隷制の廃止を訴え、大規模な暴動を起こした。その結果1848年5月ようやく奴隷制の廃止が公布されたが、その後も実質的に変わらない身分の違いのために暴動がおさまらなかったようである。

このボーゲンの画面は1枚で、白人の屋敷を襲う黒人たちとこれを防ご

1 Iwitzki, Angelika, *Europäische Freiheitskämpfe. Das merkwürdige Jahr 1848. Eine neue Bilderzeitung von Gustav Kühn in Neuruppin*, Dieter Reimer Verlag, Berlin 1994, S.79. なお、本稿ではビルダーボーゲンの作品を出版社の略記と5ケタにした版番号で示すことにする。つまりNRGK-02103はグスタフ・キューン社発行の2103番の作品である。同じように以下、エーミケ・ウント・シュナイダー社はNROR、ブラウン・ウント・シュナイダー社はMU、グスタフ・ヴァイゼ社はSTという文字にそれぞれの発行番号を5ケタで加えてそれぞれの作品を表記することとする。

うとする白人たちが描かれている。画面の左手から押し寄せる黒人たちは、棍棒や斧、そして短刀などで武装し、松明を掲げている。右手の屋敷の前では白人たちが銃やサーベルを使い防戦している。建物の2階の窓からも2名の白人が銃を発射している。手前の地面には黒人一人と白人二人が倒れ、黒人の女性が座り込んでいる。画面の中央に立っている黒人女性は自由の女神のごとく、勇ましく斧と松明を持ち、仲間たちを鼓舞している様子である。左右には南国を表すためか、バナナやヤシのような熱帯地方の植物が配置され、背景の建物は放火されて炎上している。

この画面の下には、ドイツの読者になじみのないカリブの島を扱っているためか、ボーゲンとしては異例の長文の説明（見出しを除いて37行）が付け加えられている。この説明の大半部分は事件の概要の報道である。これを要約すると次のようになる。

『自由、平等、博愛』の叫びは海を越えて、マルチニクにも達した。ここでもその言葉は人々の心をフランス王ルイ・フィリップから離反させた。この連帯の心を示すため、プランテーション所有者のエティエンヌ一家でも近隣の農場経営者を客として招き、祝宴が開かれた。立派な料理が提供され、『自由、平等、博愛』のため、乾杯が繰り返された。エティエンヌ氏が、美しい娘のルーゼとその花婿の末長い幸せのためにと、宴は最高潮に達した。しかしこの時、黒人たちが暴動を起こしこちらに向かっていてという連絡があり、居合わせた白人たちは恐怖に包まれた。何百人という黒人たちが、『血と死を』と叫び、赤い旗を立てて押し寄せてきた。エティエンヌ氏と友人たちは勇敢にたたかい、銃で何人もの黒人を倒したが、数にものをいわせた黒人たちはとうとう家の中まで侵入し、手当たりしだい殴り殺し、奥の部屋に隠れていたルーゼと花婿のところまでやってきた。ルーゼは気を失い、花婿は大男の黒人に殴り倒されたが、この時火の手が回っていたので、黒人たちは急いで家から出て行った。こうした破壊活動は他のプランテーションでも行われ、莫大な損害が生じた。それは兵士と大砲を積み込んだ軍艦が上陸し、黒人たちを平定するまで続

いた。」(要約)²

以上が事件に関する報道の部分である。ポフォール農場のエティエンヌ一家という具体的な名前が掲げられてはいるが、事件の詳細については不明な点も多い。事件の発生した日付・時刻やこの一家の建物の場所については具体的には何も記されておらず、被害の数字(死者や負傷者、建物の被害)などについても書かれていない。エティエンヌ氏ら白人たちは「自由、平等、博愛」の革命精神を讃えて、宴会を開いていたのに、それは白人の「自由、平等、博愛」にすぎず、黒人の奴隷は自分たちと対等ではないと考えていたことが、この報道から判明する。

説明文の最後の9行は出版者(GK社)の解説である。ここには次のように書かれている。

「このようにしばしば厳しく弾圧や虐待を受けている哀れな黒人奴隷の胸においても、自由への愛が目覚めたのである。彼らは白人の圧政者のくびきを離れ自由になろうと努めるようになった。何百人という伝道師たちが異教徒のもとに送られ、この伝道という目的のために多くの資金が集められ支出されているにしても、哀れな黒人たちが重く課せられたくびきに繋がれたままではいなければならないならば、それが何の役に立つのであろうか。なるほどイギリスでもフランスでも、ヨーロッパの黒人売買をなくそうとあれこれの努力はなされている。しかし今なお哀れな黒人たちが、ヨーロッパ人のプランテーションで厳しい弾圧と重い隷属のもとで溜息をつき、白人の圧政者たちを呪い、現在もひそかに、それゆえより一層悪質な形で、故国から引き離され、ポルトガルやスペインの輸送船でアメリカへ運ばれているのである以上、その努力も何の役に立つのであろうか。そうだ、哀れな黒人諸君よ、諸君にとっては奴隷のくびきからの解放の日がやがて来るであろう。そして白人の圧政者諸君よ、もし諸君が早急に自分たちの幸福と繁栄を考えなおし、哀れな黒人たちを解放しないとすれば、諸

2 Iwitzki, a.a.O., S.79.

君にとっては復讐の日がやがて来るであろう。』³

この作品では、本文で主人公であるエティエンヌ一家が被害を受けたことについて、つまり黒人が白人を襲った事件について、悲劇的に報じられているにもかかわらず、解説部分では、この暴動の原因は白人による奴隷制度と圧政であるとして、博愛主義的な観点から黒人たちの立場が一方的に弁護されている。フランスで二月革命が、そしてドイツでは三月革命がおこり、革命的気運が盛り上がっていたため、キューンのようなドイツ市民階級の人々も「自由、平等、博愛」の精神への共感を強く抱いていたようである。フランス革命以後、とりわけ19世紀前半においては、ドイツだけではなくヨーロッパの多くの国々で、スペインやポルトガルの行っている黒人奴隷の売買・輸送には強い批判が表明されていた。19世紀前半の市民階級の中にはこうした健全な人道主義の考えが強まっていたと考えられる。しかしグスタフ・キューン自身は決して革命家でも、共和主義者でもなく、一方では三月革命の革命派にある程度の同情を示しながらも、他方では、国王や将軍たちを美化した肖像画の作品を発行し、また他国との戦争においてはプロイセン軍の活躍を一方的に讃美した報道をして、いわば軍の御用機関としての役割を果たしており、本質的には、政治的現状を肯定する王党派の立場を抜け出すことはなかった。1848年の時点ではドイツはまだ外国に植民地を持っておらず、このため純粋な博愛主義の立場からこのように黒人奴隷に対する同情を表明することはできたが、本稿の第2・3章でみるように、19世紀末にドイツがアフリカに自国の植民地を持つ時代になると、同じGK社の作品においても、アフリカの原住民を弾圧するドイツ軍人たちを讃えるという立場の報道姿勢がとられるのである。もっともこの時代には初期の経営者であったグスタフ・キューン (Gustav Kühn, 1794-1868) はすでに亡くなり、その後継者たちがこうした植民地侵略を支援する報道をしたのであるが、たとえキューンが生きていたとしても、国

3 Iwizki, aa.O., S.79.

益が絡む植民地の問題となれば、おそらく博愛主義のきれいごとではなく、ドイツの国益を代弁したのではないかと想像することもできよう。

ところで、遠いカリブの島どころか、外国にもドイツ国内にも特派員や契約通信社を持たない小都市の印刷所が、どのようにしてこのような暴動の情報を手に入れ、まるで現場を目撃したかのように絵入りで報道することができたのであろうか。イヴィツキの解説によれば、グスタフ・キューンは1848年6月27日の「シュペーナー新聞」の記事を読んで、この作品を作成したようである⁴。この新聞記事には次のように記されている。

「マルティ尼克では黒人の態度が脅威を与えるようになり、このためロストロン総督はすでに5月23日に黒人の全面的解放を指令した。しかしそれによっても流血事件はなくならなかった。サン・ピエールの暴徒たちは、逃亡した農業経営者の所有地を破壊し、その家族たちがいた市内の家屋を襲った。ある居住者は尊敬すべき人物であったが、防衛のため襲撃者の一人を殺害した。その人物はただちに自らの命でこれを償わなければならなかった。家屋には火が放たれ、居住者たちは全員、焰の中へ追い返され、男も女も子供も恐ろしい死に追いやられた。総督は恩赦を公布した。白人たちはマルティ尼克から脱出し始めている。」⁵

「イラスト入りロンドン・ニュース」(Illustrated London News)以外にこの事件を報じた絵入りの新聞はなく、キューンはおそらくこの「ロンドン・ニュース」を目にはしていなかったようで、「シュペーナー新聞」の記事を読み、絵は自分で創作した模様である⁶。こうした「創作」はしばしば行われていたようで、たとえば、従軍記者も持たないGK社が戦闘場面を描く場合は、実際の戦場とは関係なく、ちょうど漫画家が見たこともない戦国時代の戦いの場面を想像して描くように、想像力を発揮して描くのが

4 Iwitzki, aa.O., S.78.

5 Iwitzki, aa.O., S.78 (*Spenerische Zeitung*, 27.6.1848). サン・ピエールは島の北西にある都市の名前である。

6 Iwitzki, aa.O., S.78.

通常だったようである。エティエンヌ一家や娘の花婿、自由のための宴会などについては「シュペーナー新聞」の記事には述べられておらず、これらも悲劇の主人公の名前をあげることで現実味を増加させ、読者の興味を引こうとするキューンの演出であろうと思われる。この作品において具体的な時間や場所が設定されていないのは、この絵が想像による創作であるという作成方法がその大きな原因であろう。

(2) 「アフリカ美人」

GK社は1850年代に一連の「美人画」ボーゲンシリーズを発行している。恋愛や結婚の幸福、一家の団欒などを強調する当時のビーダーマイア一的市民社会の考え方を示したボーゲンには若い恋人が二人で寄り添う姿や、かわいらしい子供と若い両親が仲睦まじくしている様子が描かれた作品も多いが、単独で若い美女が描かれている作品もかなり多い。1850年制作の春夏秋冬をテーマにしたシリーズ(NRGK-02380「春と夏」=2枚セット、NRGK-02385「秋と冬」=2枚セット)にこうした単独の若い美女が登場し、NRGK-02740「エリーゼ」からNRGK-02800「忘れな草」までのいくつかのボーゲンではこうした美女(市民階級の娘)が金の額縁に入れられた姿で描かれている。この額縁は聖母マリアなどの聖人や君主たちの肖像画と同じ扱いである。1855年頃に発行されたNRGK-02990「いとしい娘」、NRGK-02991「恋しい人の近く」ではゲーテやハイネの民謡調の恋愛詩に作曲がなされた歌詞がテキストとされ、それぞれ恋の対象となるような美女が描かれている。さらに1856年のNRGK-03121「野菜売りの娘」からNRGK-03126「酒場の娘」までのシリーズでは働く町の娘たちが美人画として登場している。

1852年の「アフリカ美人」(Afrika's Schönheit, NRGK-02619)⁷もこのよ

7 Riedel, Lisa und Hirte, Werner: *Der Baum der Liebe*, Eulenspiegel Verlag, Berlin, 1981, S.22.

うな美人画シリーズの一環をなすボーゲンである。これは、ほぼ同時に作成された「ヨーロッパ美人」(Europa's Schönheit, NRGK-02618, 1852年)⁸と連続の版番号での一対の作品である。それぞれの図版には4行の韻文のテキストが付け加えられている。「ヨーロッパ美人」では、胸の大きく空いたレース付きの赤いドレスに身を包み、華麗な花の髪飾りをつけ、体の前にやさしく差し出した両手で扇子を少しだけ広げて持つ白人の美人が描かれ、そのテキストには、

わが讚美するは、輝く白き肌の娘なり。

なんと親しみを覚え魅力的なることか。

そのバラの口に接吻するは、なんとすばらしきことか。

その優しき目のウィンクは——そうだ、このわれに向けられしもの。

と述べられており、美しい白人女性に憧れる男性の願望が表明されている。なお大きく描かれた若い女性の姿の周りには4つの小さな絵が配置されている。左上は教会のようなところでひざまずいて祈りをささげる一人の女性、左下はくちばしを重ねている2羽の白い鳩、右上は婚礼衣装の花嫁と花婿、右下は小さな花束を右手に持つ若い女性がそれぞれ描かれている。これらの周辺絵はこの女性がまじめなキリスト教徒で幸せな結婚を望んでいることを示しているのであろう。

これに対して「アフリカ美人」では黄色や赤の大きな葉を縫い合わせた派手な腰ミノを身にまとい、赤い縞模様のショールを背中に掛けてはいるが、胸ははだけたままの黒人の娘が描かれている。娘の目は大きく魅力的で、鼻筋は通り、口元は小さく引き締まり、たいへん整った顔をしている。娘は、頭には黄色やオレンジ色に編み上げた髪飾り、耳には金の大きな耳環、首には赤い大きなネックレスをつけ、その左肩の上には白いオウムの

8 A.a.O., S.23.

ようなエキゾチックな鳥が乗っている。娘は右手でその鳥に葉っぱの餌を与えようとしているところである。図版の下テキストには次のように述べられている。

なにしろアフリカの灼熱の太陽は肌を黒く焼く。

だがその目は炎のように愛に満ちて輝く。

齒は真珠のごとく、唇はサンゴのごとく美しい。

もしこのような美人と抱き合えば、ああ、すばらしいことに違いない。

この画像においても大きな娘の姿の周囲に4つの小さな絵が配置されている。左上はヤシの木がある南国で両親と二人の子供が描かれ、そのうち父親と一人の子供は手を前に組んで神に祈るようなしぐさをしている。左下は白人の男性が鞭を振り上げて、前にいる黒人を虐待している様子を描いている。右上の絵では、二人の黒人男性が弓矢を持ち、トラを退治したところのようで、前に倒れたトラが横たわり、これを二人は見下ろしている。右下の図は美人画にはふさわしくない残酷な様子を示している。左側に槍を持った黒人の戦士たちが大勢描かれ、先頭の黒人は切り落とした白人の首を持ちあげている。右側には首なしの胴体が転がり、その横で二人の白人がひれ伏している。白人は男性1名と女性1名で命乞いをしているようである。最初の絵はアフリカにもキリスト教が伝えられていることを示すものであろうが、あとの3枚はアフリカがいかに野蛮で危険なところかを示している。おそらくこれらは美女とは直接関係なく、アフリカというイメージをステレオタイプな形で示そうとするものであろう。

ヨーロッパの美人と同様に、アフリカの美人も対等に讃えられているのであるから、テキストそのものには、アフリカの人種を蔑視する悪意を持ったヨーロッパ中心主義の偏見は表現されてはいないように見える。しかし二つの美人画を比較すると微妙な違いが浮かび上がる。「ヨーロッパ美人」が小さな絵（花嫁と花婿）で示されているように結婚の対象として描

かれているのに対して、「アフリカ美人」は目や歯や唇などの肉体的な美しさが強調され、抱擁だけが問題にされており、二つのボーゲンを比較した場合には、後者の場合は、まじめな結婚の対象とはされていないかのような印象を受ける。

19世紀中葉におけるドイツ市民階級のモラルとしては、キリスト教的な禁欲主義が支配的であり、裸の女性を描くことは異例のことであった。聖書のアダムとイブを描く時以外は裸の女性はほとんどボーゲンには登場していない。この作品はアフリカ人という設定によって、半裸の女性を描く口実が与えられているのであろう。官能的な美しさを強調するテキストは、セクシーなアピールを売り物にしようとするこの作品の制作意図と符合したものではないかと思われる。

GK社はこの「アフリカ美人」のボーゲンに大きな愛着を持っていたのであろう。あるいはセクシーなこの図版が大いに売り上げを伸ばしたのかもしれない。いずれにしてもこの図版は、NRGK-04020（1860年頃）⁹として、再登場するのである。図版の「使いまわし」はできるだけ制作を簡単に済ませようとする、安易な制作方法として当時はしばしば行われていたようである。前述した金縁の額の形や、乗馬した君主や将軍たちの姿の同じポーズなどでは部品として同じ原板が使われていることが指摘されよう。04020番では、周囲の4つの小さい絵は取り外され、立派な花模様の額縁に入っているが、黒人の美人の姿は全く同じで、わずかに腰ミノの葉の色が変えられ、オウムは白から派手な極彩色に変わっているが、娘の胸をはだけた姿、髪型とポーズなど基本的な輪郭は以前のままである。絵の下のテキストは取り外され、「メチュンカ、アブド・アルカーディルのお気に入りの女奴隷」(Metschunka, die Lieblings-Sklavin Abdel-Kaders) というタイトルだけがつけられている。この作品にはそれ以上の説明は何も書か

9 NRGK-04020-Metschunka, ノイルピーン・ビルダーボーゲン資料センター (Bilderbogen-Dokumentationszentrum Neuruppin, 以下BDNセンター) 資料。

れてはいないが、アブド・アルカーディル（Abd al-Qadir,あるいはアブデル・カデル Abd el-Kader, 1807-1883）はアルジェリア出身のアラビア解放闘争の指導者であり、フランスの植民地支配に対して、アラブの諸部族を統率して戦った人物として知られている。女王や王女が額縁入りの肖像画で描かれるのは通常のことであるが、いくらアラビアの指導者の愛人であっても、「女奴隷」が単独の額縁入り肖像画として、ボーゲンに登場するのは極めて異例のことである。ここでも裸の若い美女の官能性をアピールして、売り上げを伸ばそうとする GK 社の経営戦略が透けて見えるようである。

(3) トルコ

1-3-1 「シノーブ大海戦」

1853年にクリミア戦争が始まり、ドイツでもトルコに対する関心が高まったようである。広大な領地と多民族を支配してきたオスマン・トルコも、19世紀の半ばになると各地のナショナリズムの高まりに存続の危機を迎えるようになっていた。この機運に乗じてかねてから南方への領土拡大をめざしていたロシアは、民族的解放を口実にオスマン帝国支配下のモルダヴィア、ワラキア（現在のモルドヴァおよびルーマニア）へ軍隊を派遣し、これに対してオスマン・トルコは軍事的対抗措置を取り、開戦となった。ロシアの勢力拡大に歯止めをかけようとして、フランスとイギリスはトルコと連合軍を形成して、1854年3月ロシアに宣戦布告した。セバストポリの包囲戦は長期におよび、フランス、イギリスの軍隊は、戦闘以外にもコレラでの病死者が多数発生し、苦戦となったが、ついにロシア軍のこの要塞を1855年9月に陥落させ、1856年3月30日のパリ条約で戦争終結となった。この結果、ロシアの南方進出に歯止めがかかったが、一方ではオスマン・トルコの弱体化が露呈し、またバルカン半島などで民族独立の意識が高まることとなった。

この戦争の様子は直ちにビルダーボーゲンでも報じられている。例えば

NROR-02342 「シノー プ大海戦」(Große Seeschlacht bei Sinope, 2tes Bild)¹⁰では、1853年11月に黒海の軍港シノー プで、ロシアの黒海艦隊がオスマン・トルコ軍を急襲し、戦艦6隻、フリゲート艦2隻などを撃沈して、トルコ側に甚大な被害を与えた海戦が描かれている。図版は1枚で、画面左手のトルコ艦隊の何隻もの大きな3本マストの軍艦が炎上し、火と煙を吐いている。画面手前の海上には小型ボートで脱出する人々や泳いで逃げようとする軍人たちが浮かんでいる。背景の陸地には要塞の城壁のようなものが描かれ、大きな弾丸がいくつも空を飛んでいる。この図は、海の上から大きな船を見下ろす位置から描かれている。このように大砲の弾丸が飛び、船が激しく燃え上がっている瞬間に、おそらく誰もこのような位置取りをするところに立つことはできなかつたと推定されるので、この絵も想像上の創作であろう。

1-3-2 「カララシの戦い」

このほかにも1854年のNRGK-02773 「ロシアとトルコの戦争、カララシの戦い」(Krieg der Russen mit den Türken. Gefecht bei Kalarasch)¹¹は1854年2月20日のモルドヴァでの戦いを、同年のNROR-02387 「シリストラの殲滅戦」(Mörderische Schlacht bei Silistria)¹²は1854年5月31日、ブルガリアのシリストラでの要塞包囲戦におけるロシア軍の突撃を、NROR-02553 「エフパトリアの戦い」(Schlacht bei Eupatoria)¹³は1855年2月、トルコ軍の橋頭保に対するロシア軍の攻撃を、NROR-02590 「セバストポリへの爆撃」(Bombardement auf Sebastopol)¹⁴は1855年5月のイギリスとフランスの砲兵隊による砲撃を描くなど、多数のボーゲンがクリミア戦争

10 Kohlmann, Theodor: *Neuruppiner Bilderbogen*, Museum für Deutsche Volkskunde Berlin, 1981, S.37.

11 Kohlmann, a.a.O., S.37.

12 A.a.O., S.37.

13 A.a.O., S.38.

14 A.a.O., S.39.

を扱っている。プロイセンは直接この戦争に加担していなかったためか、戦争の描き方（テキストの言葉づかい）は概して客観的で、自国の戦争の時のように「英雄的」、「大勝利」、「大成果」というような感情的表現はあまり見当たらない。

1-3-3 トルコ皇帝アブデュルメジド

戦争そのものの報道よりも、当時のトルコの様子をドイツ人がどのように見ていたかについて、ビルダーポーゲンを観察する方が、むしろたいへんおもしろい。GK社では、金縁の図画でヨーロッパの君主たちの肖像画を印刷してきた。そのシリーズの一環として、2枚の作品がトルコのオスマン帝国皇帝アブデュルメジド1世に捧げられている。トルコの戦争の敵国であるロシアの王室に関しても、ロシア皇太子妃 MARIA・アレクサンドロヴナ (NRGK-02715-Maria Alexandrowna, Gemahlin des Thronfolgers von Rußland, 1853年頃) やロシア皇帝妃アレクサンドラ¹⁵ (NRGK-02731-Alexandra, Kaiserin von Rußland) の肖像画を発行しているのだから、出版社が必ずしもトルコに肩入れして制作したわけではない。NRGK-02749「トルコの大サルタン、アブデュルメジド」(Abdul Medschid, Groß-Sultan der Türkei)¹⁶は1855年頃の作成であるが、トルコ皇帝アブデュルメジド1世 (Abd-ul-Mejid I., 1823-1861) が盛装の軍服姿でサーベルを片手に持って勇ましく馬に乗る姿を描いており、この描き方は他のヨーロッパの君主たちと同じような扱いであるといえる。版番号が一つ前で、この勇ましい姿と連番で対をなしている作品が、NRGK-02748「ハーレムのトルコ皇帝アブ

15 NRGK-02715-Maria Alexandrowna, Kohlmann, a.a.O., S.66. NRGK-02731-Alexandra, Kaiserin von Rußland, BDNセンター資料 (Sa-Hecht-01476)。ロシア皇太子妃 MARIA・アレクサンドロヴナ (Maria Alexandrowna, 1824-1880, 後の皇帝アレクサンドル2世の妃) はヘッセン大公の公女であり、皇帝妃アレクサンドラ (Alexandra, 1798-1860, 皇帝ニコライ1世の妃) はプロイセン王の娘であって、この二人の妃は本来、ドイツ人である。

16 BDNセンター資料 (Sa-Hecht-01477)。

デュルメジド」(Der Türkische Kaiser Abdul Medschid, in seinem Harem, 1855年頃)¹⁷である。この図版では背景には大きな噴水が配置されたトルコ風の建物の中で、中央の立派な寝椅子に皇帝が寝そべり、4人の美しい女性たちがその周りで奉仕している姿が描かれている。寝椅子の左後ろに二人の女性が立ち、振り上げた手には鈴のようなものを持っており、踊りを披露しているようである。寝椅子の手前の女性はマンドリンのような楽器を膝において床にすわり、皇帝の手をさすっている様子である。寝椅子の右後ろにもう一人の女性が立ち派手な色の団扇で皇帝をあおいでいる。一方で何百人という戦死者を出す海戦や決死の突撃が報道されているのと同じ時期に、このようにハーレムで女性たちと戯れる皇帝を描く作品を出版する意図はどこにあったのであろうか。ヨーロッパの王家の人々の肖像画が描かれる場合はたいてい軍服姿や儀式用の盛装であり、家族が描かれることがあっても、王子の結婚式や、王族の葬儀に列席している家族、あるいは一家団欒を強調するために子供たちとくつろいでいる場面などが描かれるのであり、女性と戯れるところが描かれている場合はない。アジアの皇帝はヨーロッパの王室と違って国民との身分の違いが格段に大きく、国民が戦争に巻き込まれていても、皇帝の生活には何の影響もないことを示そうとしているのであろうか。あるいは一夫一妻制の厳しいキリスト教的なモラルが支配しているヨーロッパに対して、イスラム圏内では有力な男性が複数の女性を支配することができるのを出版者は羨望の気持を持ちながら示そうとしているのであろうか。どちらにしてもこれは、トルコではヨーロッパの常識では考えられない状況が存在すること、つまりトルコが遠い異国であることを強調する作品であろう。

1-3-4 「今と昔」

クリミア戦争の結果、トルコ国内に起こった大きな変化を面白おかしく

17 Rockel, Irina: *Zur Geschichte der Neuruppiner Bilderbogen*, 1992 (2), S.27.

伝えようとする作品もある。NKGK-02871「昔と今」(Sonst - Jetzt, 1855年)¹⁸では1枚の作品に左右2枚の図版が配置され、比較のため二つの状況が表されている。いずれも背景にイスラム教の寺院が配置され、トルコの様子が描かれているが、左側の図版(「昔」)ではきらびやかな衣装に身を包んだ3名の人物が立っており、中央は口鬚をはやした伊達男で、左右の美人と腕を組み、花の咲く庭を楽しく散歩している様子である。図版の下には次のような6行の韻文が記されている。

昔は——風紀が厳重で、ハーレムはしっかり閉ざされていた。
あつかましい目が女性たちの安らぎを邪魔することはなかった。
このわしだけが彼女たちの支配者であり夫であった。
快樂があふれ、愛に満ちていた。
夕方には花の香る涼しい庭園で
楽しく散歩をしたものだった。

右側の図版(「今」)では町の中の建物が描かれ、画面左の戸口の前に困惑したような顔をした年配のトルコ人男性が立っている。男性の帯には拳銃と短刀のようなものが見える。建物の2階では窓が開き、二人の若い美女が下を見下ろしている。だが彼女たちの視線は、画面の右側の路上に立っている軍服を着た二人の若いフランス人将校たちに注がれている。フランス軍人たちはそれぞれ花束を持ち、トルコ人の男性を無視して、2階の女性たちを見ている。図版の下には同じように6行の韻文が添えられている。

今は——わしが歩哨となり武器を持って戸口に立つ。
というのも女たちをしっかりと守ることは不可能に近いのじゃ。

18 BDNセンター資料 (B-137-K), Riedel/Hirte: *Baum der Liebe*, a.a.O., S.56-57.

慇懃な態度で、われらが友、フランス人がやってきたのだ。
花が口を利き、女たちはそれを理解する。
もう絶望するしかない。ああ、アラーよ、何という時代だ。
短刀があっても何の役にもたたぬ。まったく大きな苦痛だ。

ロシアからトルコを守ってくれるはずのフランス軍人たちは、トルコ国内で古くからのトルコの風習を破壊している。トルコ国内ではトルコ人男性とフランス人男性の女性たちをめぐる熱い戦争が展開されていることを示す作品である。

1-3-5 「心からの親善関係」

GK社の連番の作品NRGK-02872「心からの親善関係」(Herzliches Einvernehmen, 1855年)¹⁹も同じテーマを扱っている。この作品も図版は2枚で左右に配置されている。2枚とも回教寺院を背景にしたトルコの町中の様子が描かれている。左側の図版では、建物の2階に二つの窓があり、3人の若いトルコ人女性が窓から下を見ている。建物の1階にも二つの窓があり、ここではそれぞれ1名ずつターバンを巻いた年配のトルコ人男性が顔を出している。画面の手前の路上には3名のフランス軍人が立っており、一人は腰を曲げて、建物の1階の男性からたばこの火を借りてお礼をしている様子である。他の二人のフランス軍人は2階の美女たちを見上げている。2階の女性の一人はフランス軍人に向けて、手紙を投げている。建物の右の背景の寺院の前の広場では赤い服を着て立つ若い娘の前に、別のフランス軍人が地面にひざまずいている様子が小さく描かれている。図版の下には次のような韻文がある。

トルコ人さん、立派な住居をお持ちで、

19 Riedel/Hirte: *Der Baum der Liebe*, a.a.O., S.58-59.

美しい調和の中でお暮らしですね。
ちょっとたばこの火をお願いいたします。
おやおや、ご婦人が窓から見ておられる。
フランス人さん、プリンツ・レгентを一服するのかい。
向こうでは戦友が、娘にひざまずいている。
これがトルコの現在の姿だ。
血なまぐさい戦争は終わったように見える。
だが新たな火種が燃え上がる。
なにせこの救済者たちは、なうての愛の追求者なのだ。

内容からすると、上記の最初の4行は、タバコの火をかりるフランス軍人の言葉であり、後半の6行は、タバコの火を提供するトルコ人男性の言葉と心の思いを述べているようである。

右側の図版も同じような場面である。噴水のある広場の左手に建物があり、2階と3階のそれぞれ二つずつある窓は開けられて、若い女性が一人ずつ顔を出し、下を見下ろしている。その建物の前の前景ではターバンをかぶったトルコ人男性と白い布を頭からかぶった女性が並んで立っているが、この女性に軍服姿のフランス軍人が近づき、花束を渡そうとしている。トルコ人男性は杖を振り上げて、フランス人を追い返そうとしている様子である。画面の右側にはやや小さく、トルコ人の女性と、この女性がかついでいたであろうと思われる大きな水ガメを頭の上に乘せたフランス人軍人が手をつないで親しそうに立っている。後方の噴水のあたりには子供たちと戯れるフランス兵、女性と愛撫しているフランス兵などがうっすらと書き込まれている。この図版の下に韻文は次のようなものである。

愛の花束です、どうぞ受け取ってください。
まあ、フランス人さん、お渡しくださいな。
わが天使よ、君の水ガメを僕がかつごう。

いとしい人、それじゃあ私があなたの兜をかぶるわ。
窓という窓から甘い熱意に満ち、
女性たちが喜びと不安の気持で覗いている。
これに対してムフティ氏は不機嫌で
陰険な目つきで見つめている。
これが新しい時代の啓蒙思想なのか。
こんなことなら遠くのクリミアへとととと行ってくれ。

フランス軍人、トルコ人女性、トルコ人男性のそれぞれの会話や心の思
いが、状況説明とともに並べられている。このような敵対的な社会問題を
描写しながら、フランスとトルコという同盟国の「心（から）の親善関係
（協調）」（Herzliches Einvernehmen）とは全く皮肉なタイトルである。こ
れらの作品で、GK社はクリミア戦争の背後で民族自立のために戦ってい
る被抑圧民族、アジアの女性の虐げられた地位などを正面から問題として
取り上げず、トルコの遅れた社会状況を面白おかしく男女の関係として興
味本位に描いているといえよう。フランス軍人とトルコ女性の愛の協調と
いうテーマは、ドイツの読者に関心をひくための販売作戦のために掲げら
れているのであろうが、それでもハーレムの存続問題など間接的にはトル
コにおける男尊女卑の古い体質が問題提起されているということもできよ
う。

1-3-6 「アジアの家庭生活」

この問題はNRGK-03134と03135「アジアの家庭生活」と「ヨーロッパの
家庭生活」（Asiatisches Familienleben, Europäisches Familienleben, 1856
年）²⁰ではアジアとヨーロッパの違いが比較されていて、より鮮明に扱われ
ている。「アジアの家庭生活」では男性が中心に配置され、大きな首飾りを

20 BDNセンター資料（B-213-K）。

つけ黄色い派手な衣装を着て、大きなソファに座って、右手で長いパイプ煙草を持ち、タバコの煙を吐いている。その胸に、右側からもたれかかるようにして、金の髪飾りをつけ、縁取りの付いた青い服、赤いスカートに黄色を主体にした帯などを身につけた、美しい若い女性が寄り添っている。男性は女性とは反対の左のタバコパイプの方向に顔を向け、左手を女性の肩に回して、偉そうなそぶり、女性を支配しているのを強調しているようである。説明文のタイトル下に「女性は制限され男性に圧迫されている」と書かれている。

これに対して「ヨーロッパの家庭生活」では、女性がほぼ中心におかれて安楽椅子に座っている。緑色を基調とした花がらのレース付きの立派なドレスを着ている。男性は右側に追いやられている。青い上着に赤いネクタイをした男性は右手から女性の左肩にもたれるように寄り添って、女性に大きな金のネックレスをかけようとしている。タイトルの下の説明は「女性は尊重され、男性と対等とみなされる」とある。

アジアとヨーロッパのそれぞれの「家庭生活」という二つの作品の基本的な違いは、アジアにおいては男性が中心に位置し、態度も尊大であり、女性が従属的な態度をとっているように描かれているのに対し、ヨーロッパにおいては、女性が中心に位置し、男性が奉仕的な態度をとり、女性に大きな比重が置かれていることであろう。

「ビルダーボーゲンに見る家庭観」²¹でみたように、19世紀中葉においてはドイツにおいても固定的な女性観が支配的で、家庭的であるべきことや控えめであるべきことなど女性への古い考えが残っていたことは明らかであるが、アジア（トルコ）と比べればまだ男女対等にいくらかは配慮されていたといえよう。しかしヨーロッパで男性が女性を大事にしようとするのは中世的な騎士道の影響で、礼儀として発達してはいたが、実際には女

21 拙稿、「ビルダーボーゲンに見る家庭観」、関西大学『人権問題研究室紀要』第63号（2012年3月）、63頁以下。

性の社会的進出はきわめてわずかで、職業の選択の余地もほとんどなく、主婦としての役割が強調されるなど、政治的、経済的、社会的に男女平等であったとはとてもいいがたい。

第2章 アフリカへの植民地進出とビルダーボーゲン

(1) アフリカでの植民地支配の前段階

1884年にドイツはアフリカに植民地を設立し、植民地政策に乗り出すが、すでにそれ以前にボーゲンにはアフリカを扱った作品が点在する。1848年からミュンヘンではB&S社が、1867年からシュトゥットガルトでGW社がボーゲンを発行するようになり、これらの新規参入の2社はすでに初期からアフリカへの関心を作品に示している。この2社はノイルピーンの2社とは違って、時事的な報道という方針を取らず、娯楽的あるいは教育的な観点からの作品を基本とした作成方針を取った。まず図鑑的な外国事情としてアフリカを扱った作品をいくつか見ていきたい。

2-1-1 奴隷狩り

B&S社では「絵に見る世界」(Die Welt in Bildern)というシリーズを発行し、世界の珍しい風景や動物・植物・人々の暮らしなどを作品に描いている。このシリーズの第7号(MU-00314, 1860-61年発行)²²がアフリカを扱っている。ここでは縦長のボーゲンに上下に3枚の絵が描かれている。一番上の図版は「サハラの前線」とタイトルがあり、荒涼とした土地に一人の黒人の死体が横たわっており、ハゲワシやハイエナ、カラスやジャッカルがむらがってその死体をあさっているところが描かれている。2番目の絵は「中央アフリカの奴隷狩り」と題され、ヤシなどの生い茂る丘陵地

22 Münchener Bilderbogen, Nro.314, Die Welt in Bildern, 7.Bogen, Schlacht in der Sahara, Braun und Schneider, München, 6. Aufl.

を背景に、左手には裸の黒人奴隷たちが槍を持った戦士に追い立てられ、画面の中央に向かって列を作って歩いている。右手には馬に乗った領主と武装した戦士が控え、これを見守っている。画面の手前では黒人奴隷が4人倒れている。そのうちの一人の首を戦士が手を伸ばして締めあげている。この奴隷狩りをしているのは白人ではなく、槍で武装した黒人の戦士である。絵の下の説明によると、馬に乗った領主（黒人）はボルヌーの سلطان ということである。この領主はボルヌー（現在のナイジェリア、チャドなど）の大きな領土をかかえる支配者であったようである。下の絵は「南アフリカの水飲み場」というタイトルで、シマウマやアンティロープ、サイなどが水辺で水を飲んでいいる様子が描かれている。

この作品の目的は世界の珍しい光景を客観的に示すことであるため、サハラ死体や奴隷狩りも現実的な世界であろうから、それほど人種差別的な意図はないと言えるかもしれない。しかし奴隷狩りは、それを買って労働力としてアメリカなどの新世界へ売り付けようとする白人の奴隷商人が背後に存在するから行われるのであって、そのためにアフリカの領主が同じアフリカ人を捕獲しているのであろう。したがって、アフリカ人同士の強者と弱者の戦いのように描くこの図版は、事態の表面だけを捕えたものであり、奴隷狩りの本質を覆い隠すものであるという指摘もしておかねばならない。

2-1-2 「南アフリカ旅行隊」

MU-00482「絵に見る世界、第19号、アフリカ」(Die Welt in Bildern, 19.Bogen, 1868-69年)²³も第7号同様に三つの図版が掲載されている。上の図版は、「南アフリカ旅行隊」というタイトルで、数名の白人が鉄砲を手に馬や牛に乗り、黒人たちが幌馬車を牛にひかせている様子が描かれてい

23 Münchener Bilderbogen, Nro.482, Die Welt in Bildern, 10.Bogen, Afrika, Braun und Schneider, München, 5. Aufl.

る。何頭もの牛（手前の馬に乗った人物の影ではっきりしないが、見たところ8頭はひいているようである）が幌馬車をひいているのに、道が悪いのか、何名もの黒人が馬車を押ししたり車輪を回したりしている。2番目の図版「原始林の象」は原始林の中の象の群れが描かれている。象は鼻で大きな木の枝をつかんだり、木を倒したり、大暴れの様子である。下の絵は「北東アフリカの雨期における増水した川」という標題があり、カバやワニたちがひっくり返って、大木とともに川の急流に押し流されていく様子が描かれている。象がこのように大暴れしたり、カバが腹ばいになってひっくり返ったりすることはめったにないことであろうと想像されるが、おそらく躍動的な画像を描こうする画家の演出なのであろう。野生の国であることを過度に強調しているようにも感じられる。

2-1-3 「オリентから」

ST-00065「オリентから」(Aus dem Orient, 1868年)²⁴は野生のアフリカではなく、中近東を描いている。先行するB&S社の「絵に見る世界」を真似たのか、同じように縦長で、3つの画像を掲載している。上の絵は「カイロの市の日」(Markttag bei Cairo)と題があり、背景に都市(カイロ)の城壁が描かれ、その外(市の郊外)で多くの人々が地面に座ったまま商品を並べて売っている。画面の右手には商品を運ぶラクダが小さく描かれている。

2番目の絵は「バグダッドの物語芸人」(Ein Märchenerzähler in Bagdad)というタイトルで、右手の奥にうっすらと巨大な都市の建物が背景に描かれ、広場に大勢の人々が輪になって座っている。その真中にターバンを巻いた男性が立ち両手をやや開いて物語を集まった人々に聞かせている。聞いている人々は、子供だけでなく、大人や年寄りも交じっており、暗い影につつまれているので正確な数は不明であるが、ぎっしりと数十人

24 Deutsche Bilderbogen, Nr.65, Aus dem Orient, Gustav Weise, Stuttgart.

はいる模様である。これだけの人々が集まるとなると、大道芸でもかなり面白い話であろうと想像される。ドイツの大道芸であるベンケルザングの場合、通常は話の概要を示した図版を掲げ、バイオリンやアコーディオンなどの楽器で伴奏が行われていた。しかしこの作品ではそのような図も楽器も見当たらない。鳴り物なしの落語や講談のようなものかもしれないが、芸人が両手を広げ胸を張っている姿勢からすると、詩吟のように韻文で朗々と歌い上げているようにも見える。

下の図版は、「水汲み人」(Wasserträger)と説明があり、背景に大きな回教寺院がそびえたつ街(町の名前は記されていない)でたくさんの人々が頭に大きな水ガメをのせて水を運んでいる様子が描かれている。水を運んでいるのは全員女性たちのようである。この作品はヨーロッパでは見られないオリエントの様子を客観的に伝えようとするものであろう。

2-1-4 「象の復讐」

以上は比較的客観的に外国の事情をそのまま描こうとする作品であるが、これに対してアフリカや南洋の国を舞台にして面白おかしく物語を創作して楽しませようとする作品もある。MU-00354「象の復讐」(Die Rache des Elefanten, 1862-63年)²⁵はビルダーボーゲンの作者として有名になったヴィルヘルム・ブッシュ(Wilhelm Busch, 1832-1908)の作品である。このボーゲンでは12コマの小さな画像で物語が展開される。アフリカで象が水飲み場で機嫌よくしているときに、いたずらをしようと一人の黒人が弓で象を打つ(第1-3図)。矢は象の尻にあたったが、象はひるまず、それどころか怒りに燃えて黒人を追いかけ、長い鼻で黒人の耳を捕えた(第4-5図)。象は捕えた黒人を川辺に運び、水に沈め、ワニの口もとへぶら下げ、陸に戻して、鼻に蓄えた水を黒人に噴射した(第5-9図)。再び象は黒人

25 Münchener Bilderbogen, Nro.354, Die Rache des Elefanten, Braun und Schneider, München, 3. Aufl.

を捕え、サボテンの茂みに放り投げ、黒人はサボテンのとげだらけになってしまった(第10-12図)。このように黒人がひどい目にあったという作品であるが、黒人を痛めつけるのは白人ではなく、象であり、また痛めつける理由は、黒人がいたずら半分に矢を放ったからであって、象は理不尽に暴力を用いているわけではない。ブッシュの作品ではたくさんのいたずらする(白人の)子供が登場し、それぞれ厳しい罰を受ける(たとえば『マックスとモーリッツ』では二人のいたずら小僧は粉にひかれてアヒルに食べられてしまう)のであって、悪いいたずらが処罰を受けるのは通常のことである。したがってこの作品で黒人がひどい目にあう結末が描かれているが、これによって人種差別がなされているとみなすことはできないであろう。

2-1-5 恩知らずな「野蛮人」

MU-00498「実直な農場主と恩知らずな野蛮人たち」(Der brave Farmer und die undankbaren Wilden, 1868-69)²⁶はこれに対して、大いに問題のある人種差別的な作品であろう。この作品は15コマで物語が展開される。森の中を酋長と戦士の二人の「野蛮人」が歩いて行き、農場主(白人)の家にやってきた。農場主はカンガルーとカモノハシのステーキをごちそうした(第1-3図)。二人の「野蛮人」は満腹になり、贈り物までもらって森へ帰るが、そこでタバコを吸いながら悪だくみをする(第4-5図)。夜中に二人は松明を持って、農場主の家にやってきて、壁に穴を開けて侵入しようとしている(第6-8図)。まだ帳簿をつけるために起きていた農場主は物音に気付いてこっそり屋外に出る(第9-10図)。「野蛮人」たちは壁に開けた穴から体を半分中へ入れて、侵入するところだったが、農場主は二人の腰の帯を木の壁に釘でうちつけて二人を動けないようにした(第11-13

26 Münchener Bilderbogen, Nro.498, Der brave Farmer und die undankbaren Wilden, Braun und Schneider, München, 10. Aufl.

図)。壁の外に出ている二人の尻を農場主は鞭でうちつけ痛めつけた（第14図）。最後のコマ（第15図）ではお尻をさすりながら森へ帰る二人の「野蛮人」を描き、その下には「お前たちステーキを欲張る野蛮人よ、おまえたちこそがさっさと（ステーキのように）叩きのめされ、焼かれてしまうがよい」というテキストが書かれている。確かにごちそうをしてもらったのに、恩知らずにもさらにごちそうを奪おうとして盗みに入ろうとする「野蛮人」の行動には問題があろう。しかしここでは白人の農場主は、はじめから「実直」で、親切な人物として設定され、現地人は「野蛮人」で、物欲だけで行動する礼儀知らずな性格という設定が前提となっている。立派な家屋で生活する農場主と森の中で暮らす原住民との経済格差が、白人の植民地的侵略から生まれてきていることは全く問題とされていない。農場主の財産や豊かさは植民地において原住民たちの労働力や財産を搾取することによって蓄積されたものではないのだろうか。こうした事情を配慮せず、恩知らずな「野蛮人」はステーキにして殺してしまえというのは、ジェノサイドにつながる人種差別的な発言であろう。なおこの作品の背景である場所がどこなのか作品には何も書かれていないが、カンガルーやカモノハシの肉が出てくるので、オーストラリア大陸が舞台とされているのであろう。

2-1-6 「高貴なる音楽の讃歌」

GW社のST-0007「高貴なる音楽の讃歌」(Lob der edlen Musica, 1867年)²⁷は歌謡ボーゲンである。詩を作詞したのは、エマヌエル・ガイベル(Emanuel Geibel, 1815-1884)という詩人である。この歌謡はたいへん人気があったようで、GK社でも同じ歌詞をテキストにして作品が発行されている²⁸。テキストには次のように歌われている。

27 Deutsche Bilderbogen, Nr.7, Lob der edlen Musica, Gustav Weise, Stuttgart.
28 NRGK-09626-Lob der edlen Musika. BDNセンター資料 (Sa-Hecht-0686)。

- (1) 陽気な楽士、ナイルの岸で 行進だ。(オー、テンポラ、オー、モーレス。) /そこに川から大きなワニが現れた。(オー、テンポラ、オー、モーレス。) /ワニは楽士を一飲みにしよとしている。(それで一体どうなったのか。ユッハイ・ラッサッサ、テンポ・テンポラ。いつも讃えられるべきは、音楽さまだ。)
- (2) そこで楽士は取り出す、バイオリン。 /上手に弓を楽器にあてて、 /アレグロ、ドルチェ、プレスト。
- (3) 楽士が最初の曲を奏でると、 /それに合わせて、ワニは始めた、ワニ踊り。 /メヌエット、ギャロップ、そしてワルツ。
- (4) ワニはくるくる回る、砂の中。 /7つのピラミッドの周りで踊る。 /ピラミッドは昔からグラグラしている。
- (5) ワニはピラミッドに押しつぶされ、 /楽士は酒場へ入り、その胃袋に流し込んだ、 /トカイ・ワインにブルグンド・ワイン。
- (6) 楽士の喉(のど)は、底抜けの穴のごとし。 /いつまでも飲むのをやめず、今日も飲む。 /それでわれらも楽士と飲むのだ。

ガイベルがこの詩を発表したのは1840年のことで、ドイツの植民地進出がまだ始まっていない時であった。ガイベルは酒飲みの歌として、面白おかしくアフリカを舞台にした詩を書いたのであろう。歌謡ボーゲンにふさわしく、画面も工夫されている。縦長の紙面は大きく4段に分けられている。最初の段はやや大きめで、アフリカのピラミッドやヤシの木を背景に、中央にバイオリンを持ち、山高帽をかぶり、燕尾服を着た楽士が立っているが、その燕尾服の裾を右手から大きなワニが食らいついている。ピラミッドの上の空の部分に虹のように弧を描いてこの歌の音符が五線を引いて掲げられ、その下に1番の歌詞が書き込まれている。2段目はさらに左右に二つに分割され、左側の図版では楽士がバイオリンに弓をあて、ワニがかしこまって座っている様子が描かれ、2番の歌詞がその絵の下に書き込まれている。右側の図版では楽士はバイオリンを持ちあげ、曲は佳境に入っ

た様子で、ワニは2本足で立ち踊っている。下には3番の歌詞。3段目は横長の一枚で左隅のスフィンクスのような岩に楽士は座って楽器を弾き、画面中央ではワニが大暴れ、その周囲ではピラミッドが崩れて、大きな石が飛んでいる。下には4番の歌詞。4段目は左右に二つの画面に分割されている。左側ではワニはピラミッドのがれきの中で大きな石の塊に押しつぶされ、画面の左手で楽士は楽器を下において、ハンカチで汗を拭いている。下には5番の歌詞。4段目右側の図版はビア・ガーデン風の飲み屋のテーブルに座り、エジプト人の給仕が持ってくるワインの壺を次々に飲み干している楽士が描かれている。この歌は内容からして、バイオリンの力で、ナイル川のワニを踊らせ、ピラミッドをぶっ潰したという奇想天外の大ボラで、楽しく酒の席を盛り上げようとするざれ歌である。ボーゲンはこれを歌詞に忠実なイメージとして画像に描いたものである。

2-1-7 「アフリカでの動物捕獲」

ST-00139「アフリカでの動物捕獲」(Der Thierfang in Afrika, 1869年)²⁹では、12コマの画像でアフリカの野生動物の捕獲の仕方が紹介されている。それぞれ2コマずつ6種類の動物が捕えられる。最初はカバで、ジャングルの狭い通路にカバを追いこみ、そこをカバが通過すると、地面に仕掛けてあった鎖が外れ、滑車をつないであった枝の上から、ギロチンのように巨大な三俣のとがった鉄の捕獲装置が落下して、カバの頭と地面に突き刺さり、カバは地面に打ちすえられて捕獲される(第1-2図)。次はトラである。トラの通る道に強力なトリモチの付いた葉っぱをバラまいておくと、トラの足や尻尾や毛に葉っぱがくっつき、トラはおとなしくなって捕獲できる(第3-4図)。ヌー(牛カモシカ)には餌場の草にカギタバコをまいておく。ヌーはくしゃみが止まらなくなり、けいれんを起こして、容易に捕獲される(第5-6図)。サイの捕獲は危険である。サイを怒らせて、追

29 Deutsche Bilderbogen, Nr. 139, Der Thierfang in Afrika, Gustav Weise.

いかげさせる。追いかけられた人が素早く大きな木の陰に隠れると、サイは勢い余って角でその幹を貫き身動きできなくなる。幹の反対側まで突き出たサイの角をねじで固定して捕獲する。そのまま意気消沈させ放置するとサイは空腹のためおとなしくなる（第7-8図）。ワニの捕獲では、巨大な分銅（重り）と大きなハンベルマン（兵士の恰好をした操り人形）をつけたシーソーのような捕獲装置をしかけておき、ワニがハンベルマンに攻撃を仕掛けようとして片方のタル木の上を通過すると、巨大な分銅が落下し、タル木は空中に振りあげられて、ワニはその上で空中に持ち上げられ捕えられる（第9-10図）。最後は象の捕獲である。地面に大きな穴を掘り、そこに水をため、その水たまりにはひそかに氷製造のための管をしかけておく。象が水を飲もうとして穴に長い鼻を突っ込むと、氷製造機を作動させ、水を凍らせる。すると鼻のまわりに氷がくっつく。捕獲者は親切そうな顔をして象に菓を与え、鼻風邪を治す。すると象は犬のようになって、捕獲者についてくる（第11-12図）。

カバやワニのために巨大な捕獲装置を作ったり、象のために氷製造機を作ったりするなどは非現実的であろう。数百kgもあるワニと釣り合う分銅をどうやってジャングルの中に運び込み、ワニを釣り上げる大がかりな装置をどのように組み立てることができるのだろうか。トラのとりもちや、ヌーのカギタバコも実際にはそれほど効力を発揮するとは思われない。これらの捕獲は前述の「音楽の讃歌」でワニを躍らせて、ピラミッドを破壊するのと同じく大ボラの類であろう。読者にアフリカの珍しい動物を示しながら面白おかしく話題を提供しようという娯楽作品である。それにしてもカバに巨大な鉄の塊を突き刺すなどの発想は、動物愛護の精神に欠けると指摘されるべきであろう。人間は動物や自然を支配できるし、支配すべきであるという伝統的なヨーロッパ的思考が基礎にあるのであろう。自然や環境を大切にし、生きとし生けるものに憐れみを持ち、自然との共存の中で人間の生き方を考えることはできないのであろうか。

(2) アフリカへの植民地進出開始

2-2-1 「カメルーンの腕組ワルツ」

1884年はドイツ第2帝政の植民地支配が始まった年である。この年の7月5日にトーゴランド（今日のトーゴとガーナの一部）がドイツの保護支配下にはいり、7月14日にはカメルーンもドイツ保護地域となった。この植民地支配を扱った作品がさっそくGK社で制作されている。それはNRGK-07948「カメルーンの腕組ワルツ」(Der Schunkelwalzer in Kamerun, 1884-85年)³⁰である。画面ではカメルーンのヤシの木の前で7名の人物が横1列になって腕を組み踊っている。両端は黒人の少年で楽しそうな踊りを盛り上げる脇役の人物であろう。中央の5人は大きく描かれ、特別な人物のようである。向かって左から順に観察すると、最初は旗を持ちセーラー服を着た白人男性（水兵）である。ドイツ海軍の代表としてここに描かれているのであろう。2番目は半裸の黒人女性であるが、首に巻いたネッカチーフに「ベル夫人」(Frau Bell)と書いてあるので、現地の王ベルの妃なのであろう。中央の人物は虫取りの網と虫かごを持った白人男性で、かぶっている山高帽には「自然研究者」と書かれている。その隣は黒人の男性で、この人物も半裸で裸足であるが、かぶっている帽子には「ベル王」(King Bell)と書かれている。最後の人物は白人女性でロングスカートに花がらの帽子という盛装で、隣のベル王の顔をさすっているようなしぐさで、親しそうにしているが、人物を特定する説明は書きこまれていない。

まず中央にいる「自然研究者」であるが、なぜこのような主役の位置にいるかという、この人物こそカメルーン植民地化の立役者となったグスタフ・ナハティガル(Gustav Nachtigal, 1823-1885)なのである³¹。ナハティガルは大学で医学を学び、軍医となったが、結核にかかり、転地療養の

30 Brakensiek, Stefan: *Alltag, Klatsch und Weltgeschehen: Neuruppiner Bilderbogen*, Verlag für Regionalgeschichte, Bielefeld, 1993, S.141.

31 Vgl. Brakensiek, a.a.O., S.142.

ためアルジェリアやチュニジアに滞在し、アラビア語を学んだ。その後、軍医や探検家としてアフリカ各地を旅行し、アフリカ事情に通じるようになった。1882年にナハティガルはチュニスにおけるドイツ総領事に任命され、ビスマルクの命に従って、トーゴやカメルーンをドイツ保護領とする植民地政策活動の先頭に立ったのである。学者でアフリカ探検家であるため「自然研究者」と記されているわけである。

「ベル王」は本名ヌドンバ・ロベ (Ndumb'a Lobe) といい、当時のカメルーンにおけるドゥアラ族の王であった。内陸のアフリカ諸民族とドイツの貿易商との取引に税をかけて利益が得られることを見込んだベル王は、ドイツとの保護条約に署名したのである。このような背景を考えると、画面の右側に描かれた白人女性はベル王と手を組んだドイツの商業資本の化身を表していると思われる。図版の下には次のような歌詞が書かれている。

というのも、僕が思うに、妖精の中にも、
君ほどかわいらしく美しい女性はいない³²。

これは19世紀に流行していた民謡調の歌謡「僕がどんな夢を見たか、知っているかい」の1節である。本来の歌詞は次のようなものである。

かわいい恋人よ、僕が
どんな夢を見たか、知っているかい。
花の香る森でぼくは横たわっていた。
僕のまわりにきれいな妖精が取り巻いた。
妖精たちはささやき、愛を語った、
僕が彼女たちの騎士だ、と。
妖精たちがまだそう語っていたとき

32 Brakensiek, S. 141.

恋人よ、僕は君に思いを寄せた。
というのも、僕が思うに、妖精の中にも、
君ほどかわいらしく美しい女性はいない³³。

この最後の2行が図版の下に印刷されているが、これが誰のセリフなのかは明記されていない。だが図版および歴史的な状況から判断すると、ベル王のセリフで、妖精よりもきれいな女性とは画面右端の白人女性を指しているように推定される。ベル王にとってはドイツの商社と組んで大儲けができるので、そうした商業上のパートナーを魅力的な女性としているのではないだろうか。

この作品は、このようにドイツ海軍、学者上がりの政治家、ドイツ商業資本がカメルーンの王夫妻と喜んで手を組んでいる様子を示しているのであるから、ドイツの植民地進出に賛成し、それを祝っているように見える。しかしビルダーボーゲンにおいてドイツやヨーロッパの政治指導者を描くときにこのような浮かれた様子で示すものがあつたであろうか。ヴィルヘルム（1世）皇帝やビスマルク首相は常に威厳ある軍服姿で描かれているのではないだろうか。これに対してベル王の扱いはどうであろうか。半裸で裸足、しかも白人女性に対して好色な顔を向けて腕を組み踊っている。全く王としての威厳は与えられていない。ドイツを代表して交渉にあつたナハティガルも、虫取り網と虫かごを持っており、まるで昆虫採集をしている子供のように描かれており、総領事・政治家としての権威は全く感じられない。こうした扱いを見れば、このボーゲンにはアフリカ問題を滑稽化しようとする制作態度が表れているといえよう。

33 ドイツ歌謡 “Denke dir mein Liebchen, was ich im Traum gesehn”。ドイツ民謡資料館の資料参照。http://www.volksliedearchiv.de/text5585.html (2012年9月19日アクセス)。

2-2-2 「植民地あれこれ」

ドイツは植民地支配に乗り出したものの、多額の軍事費が必要とされ、それに見合う利益が得られるかどうかという疑問がくすぶっていた。というのもドイツの植民地政策はベル王らの一部アフリカ上層部の利権を優先したため、その利権にありつかなかった部族からは反発が起り、アフリカ部族間で内乱が起き、また当然のことながら支配者ドイツの進出に対するアフリカ人からの直接的な攻撃があった。さらに英仏などの列強との摩擦も当然生まれ、このためビスマルクのアフリカ進出政策もじきにそれほど積極的に展開されなくなった。こうした雰囲気背景にして、アフリカの暑さ、危険、不便などを強調するビルダーボーゲン作品もある。1885年のNRGK-07982「カメルーンのドイツ精神」(Deutschthum in Kamerun)³⁴では、白人のフリッツ軍曹が軍服を着て、二人の黒人の新兵の訓練をしている。まず軍事力の強化を考える軍国主義国家ドイツにふさわしい植民地支配である。しかし図版に描かれた黒人新兵たちは、上半身は軍帽やヘルメットをかぶり詰襟の軍服を着ているが、下半身はズボンをはいておらず、下着のままである。フリッツ軍曹はしっかりと軍服に身を固めているが、腹が大きく突き出た滑稽な姿で描かれ、暑さを防ぐために腰ベルトに大きな傘を結びつけていて、まるでピエロのようである。風土がまったく異なる熱いアフリカに「ドイツ精神」を持ちこむのは困難であると、この作品はドイツ植民地政策に対して批判的な立場を表明しているようである。

NRGK-08058「カメルーンのブーホルツ」(Buchholtz in Kamerun oder: „Siehste da haste die Wüste“, 1885-86年)³⁵も同じように、アフリカがドイツ人に適した場所ではないことを滑稽な調子で示す作品である。旅行気

34 Brakensiek, a.a.O., S.142. なおこの作品については、拙稿「キューン社の後期文学テキスト付きビルダーボーゲン」(関西大学『独逸文学』第56号、2012年、53頁以下)でも論じたので参照されたい。

35 Brakensiek, a.a.O., S.143. この作品についても前掲の拙稿(87頁以下)で論じたので参照されたい。

分でカメルーンへやってきたブーホホルツ（ドイツの典型的な俗物市民）がアフリカからドイツに住む母親に手紙を書くという設定で、12コマの小さい画面でアフリカがいかに危険で不快なところかを述べている。ここであげられている不満は、暑いこと、机もイスもないこと、トラやハイエナなど危険な動物が野放しになっていること、のどが渇いてもビールがないこと、川には危険なワニがいること、現地人はほとんど裸で野蛮であること、水道、馬車鉄道、電灯、ガスなどがいないこと、現地人がヨーロッパ人を食べると言っていること、などである。このような危険で不快な場所はすぐに退散し、次の船に乗ってドイツへ帰りたいと、ブーホホルツは最後に訴えている。

NRGK-08479「植民地あれこれ」(Allerlei aus unsern Kolonien, 1888年)³⁶では植民地開始から数年たったアフリカの、ある程度「文明化」された様子が描かれている。横長の印刷で、12コマの小さい画像が描かれ、アフリカの様子が紹介されている。それぞれの画面には4行の韻文で説明がつけられている（斜字体は説明文、カッコの中は図版の概要説明）。

（第1図）他の大国と同じように、とうとうドイツ帝国も／アフリカの大地を支配するようになった。／やがてコウノトリが、かの地から／黒人の赤ん坊を北国へ運んでくることもあるだろう。（教会や城の塔のようなものが見えるので、ドイツと思われる都市を背景にしていることが分かる。画面左手に大きく建物の窓が描かれ、そこに白人男性が顔を出している。画面右ではコウノトリが空中を飛んで窓のほうへやってくるが、その嘴には黒人の赤ん坊がくわえられている。）

（第2図）すでにアフリカは文化の洗礼をしっかりと受けた。／ブランドヴァイン（ブランデー）は女性にも愛飲されている。／グラスと壺を手を持って女性が家に届けられる。／酒がよく効いてきつと熟睡で

36 Brakensiek, a.a.O., S.144.

きるであろう。(ヤシの木の前の道を、酒で酔っ払った黒人女性が、手押しの一輪車に乗せられて運ばれていくところである。黒人女性の両手には酒瓶が握られ、手押し車を押しているのは白人男性である。)

(第3図) この絵には珍しい形のオーケストラが描かれている。／半ば訓練され、半ば野生のままの黒人女性たちだ。／歌に合わせて、バイオリン、ベース、シンバルが鳴る。／その音は遠くまで響くが、恐ろしい音だ。(黒人女性4名が音楽を演奏している。左からベース、次はボーカル、3人目はバイオリン、4人目はシンバルである。)

(第4図) 馬も乗合バスもないが、快速の旅行はできる。／ここではラクダが風のごとく疾走するのだ。／木枠の車に大人も子供も楽しく座っている。／そして汗で困らないよう、みんなはワインではなくビールを飲む。(ラクダの引く無蓋の荷車に御者以外に3人の客が乗り、この3人はビールジョッキを掲げて、氣勢を上げている様子である。)

(第5図) 頭を働かせ、巧みな手腕で幸運を得たものは、／ドイツでも同じだが、人生の重荷を感じはしない。／握手の手が差し伸べられた時、えらそぶってそれを拒絶しないこと、／それを心得ていれば、女王になるのも容易である。(画面右側では、庭園におかれた玉座のような大きな椅子に、白人女性が足を投げ出してくつろぐように座っている。画面左手では黒人の女性がバンジョーのような楽器を持って演奏し、白人女性の奉仕に努めている。)

(第6図) 郵便もすでにアフリカで取り入れられている。／この黒人少年には大いに感謝しなくてはならない。／国中のあちらこちらへ、休みもせずに、／郵便をかついで競争馬のように、この子は走る。(上半身裸の黒人少年が肩に天秤棒をかつぎ、その棒には前後に箱がついている。これは郵便物を入れた箱で、この少年は郵便配達をしているところである。背景には小さな西洋風の家が描かれ、入り口には「郵便局」(Post) という文字が書かれている。)

(第7図) 上品な礼儀作法はわが国だけで知られているだけではない。

／かの国でも花束と金モールの帽子を持って／従僕がやってきて招待がなされる。／つまりわが国と同様のお付き合いがなされている。(第5図と同様に、画面右側に白人女性が大きくて立派な安楽椅子に腰かけている。ただし後ろにカーテンがあるので場面は室内のようである。左側には黒人の少年が立ち、右手で帽子を取って礼を尽くし、左手に持った花束を渡そうとしている。)

(第8図) 見知らぬ世界には不愉快なこともある。／たいへん勇敢な英雄がしばしば残忍な死を迎えることもある。／この国ではライオンたちが自由に歩き回っている。／そして偶然にそうした獣と出くわすことがある。(背景に山が描かれた傾斜地で、右側に大きなライオンが立ち、左側には弓矢を持った黒人少年がいるが、急なライオンの出現に驚いた様子で、弓を構えることもできず、弓と矢は広げた両手でバラバラに持っている。)

(第9図) この暑い国で旅に出るときには、／人々は危険を考え武装する。／母親は末の子を背中におぶっていく。／こうしてすばやく目的地へと急ぐのだ。(木の間の道を黒人の親子連れが歩いている。中央の母親は小さな子をおんぶし、右側の先頭を行く男の子は右手に槍を持っている。母親の左手で、最後尾にいるやや大きな子供は荷物を手に抱えている。)

(第10図) 暑さでのどが渇くので、飲み物はうれしい。／そこで黒人は昼も夜もがぶがぶ飲まねばならぬ。／昔は哀れな黒人が飲むのはただ水だけであった。／だが文化によりその運命は改善されたのだ。(前景に二人の黒人が大きく描かれ、大きな瓶から何かをがぶ飲みしている。テキストからするとこれは水ではなく、ビールのようなアルコールであろう。背景にアフリカ風の小屋が小さく描かれているが、ここで飲み物を売っているのであろう。)

(第11図) コルセット、日傘、短いドレスを身につけた女性、／眼鏡をかけた伊達男が喜んでその後を追う。／文化からこれ以上何を求めよ

うとするのか。／黒人の所では自然が急速に消滅しているではないか。
(コルセットや洋風のドレスに身を固め、パラソルをさした若い黒人女性
性が野道を歩いている。後ろから眼鏡をかけた若い黒人男性が近づい
てくる。)

(第12図) 今や全世界の合言葉は『進歩』である。／いたるところで
『ドイツ精神』の凱旋入城だ。／それゆえ黒人たちも体裁を繕って洋服
を着ている。／しかし黒人が最も喜んで手に入れたのは、楽しい気持
ちにするものだった。(二人の黒人が野道に立っている。靴こそ履いて
いないが二人とも洋服を着て帽子をかぶっている。一人は手に酒の瓶
を持ち、二人は酔っ払って腕を組み上機嫌の様子である。第10場面と
同じように酒屋のような小屋が背景に小さく描かれている。テキスト
にある「楽しい気持ちにするもの」とは絵を照合すれば、アルコール
であることがわかる。) ³⁷

前述の NRGK-08058 「カメルーンのブーホホルツ」(1885-86年) では俗
物的市民が、ビールもないことに不平を言い、黒人たちがほとんど裸でい
るのに驚いたのであるが、このブーホホルツの時代から数年しかたってい
ないのに、植民地では大きな変化が押し寄せている。アフリカの植民地で
「文明開化」が進んだのである。一方ではまだ、野獣(ライオン)などの危
険が存在する(第8、9図)が、他方では、黒人たちは服を着て、眼鏡や
パラソルを身に着け(第11、12図)、礼儀作法を覚え(第7図)、洋風の音
楽まで演奏するようになり(第3、5図)、郵便制度もできあがっている
(第6図)。しかしこうした「文化」は利便性をもたらしただけではない。
同時に大きな弊害をももたらしている。この作品で最も多くのコマ数で指
摘されているのはアルコールの大量消費である(第2、4、10、12図)。ま
た道徳的退廃を示しているのが第1図である。すでに帰国しているドイツ

37 Brakensiek, a.a.O., S.144.

人男性のもとに黒人の赤ん坊が届けられるという設定から、この子が黒人女性との間の婚姻外の子供であることがわかる。ここでは白人男性と黒人女性との間の身分的な優劣関係を利用した「性的侵略」があったことが、暗に問題視されているものと思われる。気候に適さない、コルセットで締め上げる服装はアフリカの自然になじまないのは当然であるし、そのほかのヨーロッパ的価値観の押し付けが自然破壊をもたらすものではないかという危惧が第11図では表明されている。また第5図、第7図では白人女性がまるで女王気取りで横柄な態度を取っており、肌の色による身分の上下関係が示されていると言えよう。「文化」とはアルコール依存症、道徳的退廃、自然破壊のことなのであろうか。この作品を見る限り、GK社は「ヨーロッパ文化」のアフリカへの輸出には反対であり、いわゆる「進歩」や「ドイツ精神」に疑問を投げかけているように見える。

(3) 東アフリカでの紛争

アフリカ西海岸のカメルーン地域と並行して、ドイツはアフリカ東海岸（今日のタンザニア）でもほぼ同時に植民地政策を進めた。1884年末、カール・ペータース（Carl Peters, 1856-1918）は、ドイツ東アフリカ会社（Deutsch-Ostafrikanische Gesellschaft, DOAG）を代表して、アフリカの支配者たちと協定を結び、これが東アフリカ保護領の基礎となった。1888年4月28日にDOAGはザンジバルの支配者カリファ・ビン・サイド（Khalifa bin Said, 1852-1890）と新たな協定を結んだが、これは民間企業であるDOAGが統治権と、海岸貿易の税金を徴収する権利を内容としたもので、これまで象牙の貿易などを行ってきた現地の商人や、ドイツによる植民地支配をそもそも歓迎しないアフリカ人の反感を招いた。中でも自らもプランテーションを営んでいた現地の商人アブシリ・イブン・サリム・アルハルティ（Abushiri ibn Salim al-Harthi, 通称ブシリ Buschiri, 1889年処刑）が反ドイツ運動の指導者となり、武装抵抗運動が拡大した。DOAGの職員に危害が加えられる事件が頻発し、DOAGはドイツ政府に正式に援助を要

請した。ビスマルク政権は多額な軍事予算を組み、ヴィスマン（Hermann von Wissmann, 1853-1905）を政府代表委員とする軍隊を派遣した。軍事力に勝るヴィスマン隊は女性や子供を含む数千名の現地人を殺害し、ブシリは捕えられ、軍事裁判にかけられて、即刻死刑執行された。1890年11月20日に正式にドイツ政府が東アフリカを統治する条約が発効し、民間企業である DOAG の活動はプランテーション経営と貿易業務に限定されることになった。

ビルダーボーゲンのこの事件を扱った時事的作品は、ドイツの侵略的アフリカ支配を肯定する立場から報道し、あるいは作品によっては非人道的弾圧を英雄的に扱っている。NROR-08789「東アフリカでのドイツ海軍と反乱者との闘い」(Kampf in Ost-Afrika zwischen deutschen Marinetruppen und Aufständischen, 1888-89年)³⁸は大きな一枚の画面で、この反乱での戦闘場面を描いている。画面の左側にドイツ兵が大きく描かれ、移動式の大砲や銃を右側に向けている。右側には小さくたくさんの黒人が描かれている。黒人たちはわずかな銃と棍棒で武装しているに過ぎず、武力的装備の優劣は明らかである。黒人たちの背後では家が炎上している。この画面には次のような説明文が付けられている。

「ドイツ支配下東アフリカ海岸のバガモヨ近郊で、1888年12月5-7日にドイツ海軍と反乱者の中で戦闘が発生した。帝国艦隊『ゾフィア』号の上陸部隊は小速射砲の陸揚げに成功し、決定的な戦闘に突入した。反乱者たちは5台所有していた大砲を失って、撃退され、遠方まで追撃された。バガモヨの住民の住む家屋の一部がこの戦闘でわが軍の榴弾射撃によって炎上した。」

図版も説明文もドイツ側からの一方的な立場での報道である。さらに、NRGK-08763「反乱指導者ブシリの軍事裁判による銃殺」(Standrechtliche

38 Brakensiek, a.a.O., S.150.

Erschießung des Rebellen-Anführers Buschiri, 1889年)³⁹では反乱軍の指導者ブシリの死刑執行が報じられている。

画面の左端にブシリが木に縛りあげられている。画面中央に指揮官のような二人の白人男性（説明文からするとヴィスマン少佐とシュミット博士）が立ち、右側の将校（シュミット博士）は刀を抜いており、発砲の命令を下した後のようである。画面の右側では6名のドイツ兵が銃をブシリに向け、銃からは煙が出ているので、一斉に発砲した直後の瞬間であろう。背後にはドイツ海軍の旗が掲げられ、大勢のドイツ兵が列を作ってこの処刑を見ており、その左側にはターバンを巻いた黒人たちも大勢見ている様子が描かれている。（黒人の中にもドイツ側について利権を得ようとする者や、ドイツ側から金をもらって傭兵となる者もいたようである。）画面の下には次のような長文の説明が付けられている。

「東アフリカにおけるわが植民地軍隊指導者たちの勇気と豪胆さにより、ついにもっとも危険で残忍な人物、つまり反乱の中心人物であるブシリを捕え無力化することに成功した。この1年間というもの、東アフリカの事態に関心を持って見続けてきた祖国を愛するすべてのドイツ人にとって、このアラビア人は恐怖の的であった。わが軍の数百名の兵士がこの男の残忍さの犠牲となった。逮捕される直前においても、この男はヴィスマン少佐との停戦協定を破り、1名のドイツ水兵を捕獲し、その切り取った両手をドイツ側へ送り届けたのである。1889年12月15日、とうとうこの男はシュミット博士によって逮捕された。即日、この男は軍事裁判により死刑判決を下され、戦場での慣例により、即刻、銃殺された。ヴィスマン少佐および多数の兵士と現地人が居合わせる中、シュミット博士の号令により、6名の海軍兵士が6発の命中弾により、この冷酷な人間を倒した瞬間を、この図は示している。」

ここでブシリがアラビア人とされているのは、父親がアラビア系であっ

39 Brakensiek, a.a.O., S.151.

たためであるようである（母親はアフリカ黒人であった）。この東海岸にはアラビア系の商人も多く、象牙などの取引を行っていたようであるが、この反乱はアラビア人が起こしたわけではなく、ドイツの植民地支配と現地の住民が対立したものである。ここではブシリが銃殺される場面をまるで見て来たかのように図版に描いているが、この光景は全くの創作である。というのもブシリは銃殺で処刑になったのではなく、絞首刑になったのが真相のようであるからである⁴⁰。

いずれにしてもここでの GK 社の報道姿勢はドイツ政府およびドイツ海軍の宣伝活動と言わなくてはならない。実際に東アフリカに取材したわけでもなく、情報源がドイツ軍側からのものだけであろうから、こういう報道もやむを得ないのかもしれないが、歴史的な事実に基づけばもう少しましな報道ができたのではないかと思われる。まず、ドイツが国家として正式に東アフリカ（タンザニア）を統治するようになったのは1890年11月のことであって、ブシリを軍事裁判にかけ、処刑した時期（1889年12月）には私的企業である DOAG が現地の領主と協定を交わしていただけではないのだろうか。その現地の住民であるブシリをどうしてドイツ軍が軍事裁判にかけ、即刻処刑する権利があるのだろうか。もともとこの反乱の原因になったのは、DOAG の不当な権限・利権の獲得であり、アフリカを自らの支配下に置こうとする強引な植民地活動なのである。この侵略的植民地主義への批判的立場がこの報道には初めから欠如している。さらにここではドイツ人の手が切り取られたということを強調し、この反乱指導者がいかに残忍であるかが報道されているが、ドイツ人のアフリカ弾圧活動やドイツ軍による残忍な現地人殺害については何一つ報道しようとしていない。ドイツ国内にいても議会や政府への報告書や、外国の報道機関の記事などを読めば、逆にドイツ人こそがどれほど残忍であるかが、少しぐらいは情報として伝わっていたであろう。例えば DOAG の代表カール・ペータース

40 Brakensiek, a.a.O., S.152.

は、自分の黒人の妾が下僕と密通したことが判明すると、二人を絞首刑にしたうえ、二人の出身の村落を焼き払うなど、アフリカ人に対する残酷な姿勢を取った。このためペータースは1892年に本国送還となり、懲戒裁判所で身元調査を受け、免職、称号剥奪の処分を受けている。ドイツ側の残忍さには全く目をつぶり、ドイツ軍の「勇気」と「豪胆さ」などを主観的に強調して報道する姿勢からすれば、こうしたボーゲン軍の御用機関の役割しか果たしていないといえるだろう。

(4) ヘレロ族の蜂起

南西アフリカ（今日のナンビア）でも1884年以来、ドイツの植民地化が進められたが、1904-08年にはドイツ軍と現地の住民（ヘレロ族およびナマ族）との間で大規模な軍事衝突が起こった。現地住民の暴動の根本的な要因は、現地住民に対するドイツ人の強圧的な支配が不満をもたらしたことであるが、とりわけ、オタヴィ鉱山鉄道会社（Otavi-Minen- und Eisenbahngesellschaft）による鉄道建設が、土地所有者や住民の了解もなく、高圧的な態度で進められたことへの反発と、数年間続いた家畜の伝染病のため牛の牧畜などで生計を立てていたヘレロ族は経済的困難に直面し、ひどい待遇のドイツ人の下で働かねばならなかったことなどが重なって、ヘレロ族の領主サムエル・マハレロ（Samuel Maharero, 1856-1923）は1904年1月12日に、ドイツ人の施設やプランテーションに対する武力攻撃を開始した。ドイツ領南西アフリカの総督であったテーオドル・ロイトヴァイン（Theodor Gotthilf Leutwein, 1849-1921）は、マハレロとの過去の個人的友好関係を利用して、事態を融和的に解決しようと試みたが、武力攻撃の犠牲となったドイツ人の家族からも現地で生命の危険にさらされているドイツ人移住者たちからも「生ぬるい」と批判され、ドイツ政府はロイトヴァインを総督から罷免し、新たにトロータ中将（Lothar von Trotha, 1848-1920）を現地の司令官として送り込んだ。近代的兵器で武装したドイツ軍は1904年8月15日、ウォーターベルクの戦いでヘレロ族の「反

乱軍」を決定的に敗北させた。その後ドイツ軍はヘレロ族をオマヘケの乾燥地に封鎖し、このため大量のヘレロ族が水不足のため死亡することになった。トロータはマハレロを捕えた者に5000マルクの懸賞金を出すとしたうえで、ヘレロ族をドイツ領内から絶滅すると宣言した。トロータは生き残ったヘレロ族を強制収容所に収容し、重労働を科した。こうした民族の大量虐殺はナチスによるユダヤ人絶滅政策のさきがけとなったものである。1904年頃に約10万人いたヘレロ族であるが、1911年には人口の80%を失い、約2万人にまで減少したといわれる。ナンビア南部のナマ族も1906年10月に武装蜂起して反乱を起こしたが、1908年までにトロータの率いるドイツ軍に鎮圧され、その後強制収容所に収容された。ナマ族も約1万人の死者が出たとされる。

NROR-10016「ドイツ領南西アフリカにおけるヘレロ族の暴動、ウォーターベルクの突撃」(Herero-Aufstand in Deutsch-Südwest-Afrika - Die Erstürmung von Waterberg, 1904年)⁴¹はこの事件の最大の戦場での戦いを描いている。画面の前方には山のふもとから大勢のドイツ兵が鉄砲を持ち、坂を駆け上がって突撃している。画面の後方右には黒人(ヘレロ族)が陣地を作ってこれに反撃しているが、この陣地にはいくつも砲弾が命中し、砦の建物などが炎上している。画面の下には次のような説明文がある。

「8月11日朝、ミューレンフェルス(Mühlenfels)少佐の部隊が敵への攻撃を開始し、きわめて激しい戦闘の末、敵をハマカリまで後退させ、この地を確保した。この地に8月12日朝、ダイムリング(Deimling)隊が到着し、この部隊は刺だらけの灌木のもと、忍耐力を持って戦い、ミヒヤエル首領の率いるヘレロ族を大きく後退させ、オムヴェロウムエにある峠を突破し、夕刻には、強固な軍事基地として要塞化されていたウォーターベルクの敵陣を奪取した。ヘレロ族の死者と負傷者の損害は甚大である。」

ここではドイツ軍将校の名前が挙げられ、この戦いの勝利の英雄として

41 Kohlmann, aa.O., S.56.

描かれている。NRGK-09760「フランケ大尉の新たな戦いで勝利」(Neues siegreiches Gefecht des Hauptmann Franke, 1905年)⁴²でもヘレロ族の暴動が扱われているが、ここではこの大尉は「南西アフリカの英雄」とサブタイトルが付けられて讃美されている。図版は1枚で、後方には山が描かれている戦場で、画面左側にドイツ兵が銃を持って攻撃し、その中心に馬に乗った将校が剣を振り上げて、突撃の命令を下している。これが「英雄」フランケ大尉なのであろう。画面の右半分は黒人(ヘレロ族)の兵士たちが描かれているが、前景にはすでに倒れた黒人たちが大きく描かれ、ヘレロ族兵士は今にも逃げ出しそうな劣勢の状況である。画面下の説明には次のようにある。

「オカハンディアとオマルルで勝利した南西アフリカの英雄は、2月25日、前の戦場から東へ50キロ離れた所でも、ヘレロ族との戦いで勝利を収めた。すでに2度も栄誉に輝いたこの勇敢な将校の大胆不敵な部隊は、オティヒナナカの給水地で10時間におよび、砲弾の攻撃も不可能な堅固な基地にたてこもって勇ましく戦う多数のヘレロ軍と激しく戦闘を行った後、まさに英雄的な力を発揮して、ついに敵の陣地を粉碎した。敵軍の損失は大きく、戦利品は2500頭の家畜である。」

ここで「英雄」とされているフランケ(Victor Francke, 1866-1936)は、南部のボンデルスヴァルトで反乱の鎮圧にあっていたが、オカハンディアでのヘレロ族との激戦を応援するために、部隊を短期間(馬で4日半)で400kmの移動をさせたという伝説的な行動をした軍人である。ビルダーボーゲンの時事報道はこうした「英雄」の勝利を報道するだけで、この反乱の原因については全く語っていない。戦闘はドイツ軍の立場から一方的に描かれ、ヘレロ族やナマ族の事情については全く配慮がなく、ましてヤトロータの民族絶滅方針や大量の虐殺、強制収容所の設置などについては全く報じられていない。このようにドイツ軍が戦闘をする場面が描かれて

42 Brakensiek, a.a.O., S.149.

いるボーゲン作品においては、一方的にドイツ軍の立場からのみの報道がなされていることが明らかである。

第3章 植民地時代の人種問題が表れている娯楽的ビルダーボーゲン

この章では、ドイツの植民地政策が本格化（1884年）してから後の、植民地が登場するフィクションの娯楽的作品について論じたい。これらの作品は、7～16コマ程度の小さい図版で構成されていることが多いが、これらを、(1)それぞれのコマが独立していて、描写対象の多角的な側面を並列的に描いている作品（「一覧ビルダーボーゲン」）、(2)それぞれのコマが連続した場面を構成しており、物語性を持った作品（「ストーリー・ビルダーボーゲン」）の二つのジャンルに分けて、考察してみたい。

(1) 娯楽的な「一覧ビルダーボーゲン」

3-1-1 「アフリカのおもしろい光景」

B&S社のビルダーボーゲンにおいても1890年代に入るとたびたびアフリカを題材とした作品が登場する。B&S社の場合は時事的な報道はほとんどなく、多くは娯乐的・教育的な作品である。MU-01060「アフリカのおもしろい光景」(Lustige Bilder aus Afrika, 1892-93年)⁴³では現実にはありえないようなアフリカの動物たちの姿が描かれている。形や大きさを変えて工夫を凝らした小さい図版が全部で8枚あり、それぞれの絵に短い韻文の説明が付けられている。図の説明に先立って、前書きが書かれている。「大地アフリカの／コンゴ川や砂漠には／珍しく面白いものが／いつもあれこれと見られる。／／そこでは茂みや森に／たくさんの動物がいる。／そこは不気味なところで／どこにも冒険が待っている。」

43 Münchener Bilderbogen, Nro.1060, Lustige Bilder aus Afrika, Braun und Schneider, München.

(第1図) それぞれのコマは独立していて、ストーリーを展開するわけではないので、どれが第1図かは特定できないが、左上から順に見ていくことにする。作品はほぼ中央で上段と下段の二つに分けることができよう。上段左の縦長の絵を第1図とすると、ここでは5匹のサルが木に登っているが、画面左上の2匹は枝の上で安全なところにいるのに対して、右上から画面中央にかけて3匹のサルが上下に上のサルの身体につかまりながら、連なって上から下へとぶら下がっている。下の地面の草むらのところに、とぐろを巻いた巨大な蛇が鎌首をもたげ、ぶら下がった最後のサルの尻尾に噛みついていて、説明は、「大はしゃぎのサルたちを、／ときどき大蛇が不安に駆りたてる」と短く述べている。

(第2図) 上段中央および上段右側はそれぞれさらに上下に二つの絵が描かれている。上段中央上を第2図、上段中央下を第3図、上段右上を第4図、上段右下を第5図としておく。第2図では人間の姿の大きさから判断すれば20mはあろうかと思われる細長い木が上下に描かれていて、その幹のなかほどに冒険服姿の白人男性がしがみついている。その下にはトラが爪を立ててこの男性を追って木に登り、木の上方ではこの男性よりも大きい巨大なサルが下へ向かっており、この男性につかみかかろうとしている。この説明文も短く、「一つの敵からうまくのがれても、別の敵の手にすぐに落ちることがある」と書かれている。

(第3図) 上段中央下には、船着き場のように陸から川に突き出した板の上に、冒険服姿の白人男性が腰をかけ、新聞を読んでいる。男性はその一枚の板でできた栈橋の水上に突き出した先端に座っているが、栈橋の陸側の付け根のところには大きなライオンが一頭腰を下ろし、男性の方を睨んでいる。男性は新聞を読むのに夢中で、ライオンに全く気付いていないようである。「この旅の人は動物に煩わされず、／最新の新聞を読むために／栈橋の上に腰をかけている。／だが気づかぬうちにライオンが来て／しゃがんでいる。いったんどれぐらいかかるのだろう。／この人が新聞を読み終えるまで。」

(第4図) 上段右上は少し趣向を変えて、丸い縁取りの絵である。画面の手前右側では一人の黒人の男性が2頭の子象を両手に抱え逃げようとしている。画面の左奥から大きな象が怒った顔をして追いかけて、長い鼻を伸ばして、黒人の耳を捕まえている。説明文は「子供(子象)を奪った黒人の／耳を象はしっかり捕えた。」

(第5図) 上段右下の絵であるが、第2図と同じような細長い木の上の高いところに冒険服を着た白人男性が枝に腰をかけて下を見ている。木の下では大きな1頭の象が怒ったように木の幹を鼻でつかんで引き倒そうとしている。幹はもうかなり傾いて今にも倒れそうである。説明文には「象は間抜けではない。／象はこのよそ者を木の幹ごと引き倒すのだ。」

(第6図) 下段には3つの絵がある、下段左はこの作品では最も大きな絵が1枚あり(第6図)、下段右側は上下に2枚の絵がある(上を第7図、下を第8図とする)。第6図では大きな象が池のほとりに人間が腰かけるように座り、池に向かって突き出した鼻の上に小象を座らせ、さらに鼻先を上に向けて、そこから水を噴水のように噴射して、小象にシャワーのような水をかけている。象の鼻の噴水は高く上がり、上の方にある木の枝につかまっているサルもこの水に触って喜んでいる。「コンゴの国で象を／見るのも楽しいことだ。／この象は子供にシャワーをかけている。／こうして象の息子がシャワーを浴びると、／サルもご利益にあずかるのだ。」

(第7図) 下段右上は横に長い図版である、ワニが水辺から半分体を陸に揚げ眠っている。水辺にはワニを取り囲んで数羽の鳥が休んでいる。一羽の鳥はワニのとがった鼻先のところに乗っている。説明文、「コンゴのワニも／昼寝をしているときには、／パクリと口を開けることもない。／一羽の鳥が口の上にとまっている。」

(第8図) 7頭の大きな象が川の中で水に足を浸しながら、一列になって、こちらの岸から向こうの岸まで川幅いっぱい並んでいる。象の背中には鉄道の線路が載っており、その上を蒸気機関車にひかれた列車が走っている。ここでは象が橋げたの代わりになっているのであるが、象は

生きている証拠に、鼻を伸ばして川の水を列車にかけたり、船に乗っている人にかけていたりしていたずらをしている。「大きな象の背中の上に／レールの鉄橋がかけられた。／この橋げたはそれだけではなく、／散水に使うこともできるのだ。」

これらの絵は実際のアフリカの動物たちの姿を画家が見て描いているわけではない。全て画家の想像の産物であろう。例えば第4図であるが、アフリカ象の子供は生まれた時でも100kg以上あり、いくらアフリカ人が屈強であるにしても、これを一人で2頭抱えて走ることは不可能であろう。第6図のアフリカ象は全く人間のように腰をおろして座っており、しかも100kg以上ある小象を鼻の先に乗せて高く持ち上げている。第8図では象が鉄橋の橋げたにされている。まったく現実的ではない、これらの図を見れば、この作品は全て画家の冗談だと思われる。ただしアフリカがたいへん危険なところであるというイメージはかなり誇張されて表されている。

3-1-2 「東アフリカのキリンたち」

MU-01075「東アフリカのキリンたち」(Die Giraffe in Ostafrika, 1892-93年)⁴⁴も前述したMU-01060「アフリカのおもしろい光景」とほとんど同じ趣旨の作品である。ここではキリンという1種類の動物だけに絞って、現実離れた画家の想像が展開される。ここでも形を変えた小さい図版が7つ印刷されている。図版の下の説明はタイトルのように短いもので、説明文は全部の絵について一つにまとめられている。この文の説明の順で当該の図版の順番をつけると、左上が第1図、中段左が第2図、上段右が第3図、中段右が第4図、下段左が第5図、下段中央が第6図、下段右が第7図となる。

(第1図)「滑り台」(Rutschbahn)。横長の画面で3頭のキリンが並んで

44 Münchener Bilderbogen, Nro.1075, Die Giraffe in Ostafrika, Braun und Schneider, München.

おり、画面の左端に木のはしごがあって、黒人の子供たちがそこにのぼり、最初のキリンの頭から滑り台のように背中の方へ滑っている。最初のキリンと2頭目のキリンはお尻を突き合わせており、滑ってきた子供は勢いよく2頭目の背中から長い首へと滑り上がる。2頭目と3頭目は頭どうしをくっつけており、子供たちは、次に3頭目の首を滑り降りて、キリンの背中からお尻へと滑り、地面へと飛び降りている。

(第2図)「旗竿」(Flaggenstangen)。道路の両端に何頭ものキリンが整列して並んでいる。電柱のようにまっすぐ上に伸ばした長い首に、様々な紋章の付いた大きな旗がかかっている。画面の手前から、牛車に乗った黒人の王侯がこの旗の間をパレードしていく。黒人の臣民たちはキリンの並んでいる地面に土下座するようにひれ伏して、王侯に敬意を表している。

(第3図)「前線勤務」(Vorpostendienst)。キリンは軍事目的にも用いられるとして、3名の黒人兵が銃などの武器を持って地面に立ち、その隣に大きなキリンが描かれている。キリンは首を伸ばし遠くを見ているようであるが、その首には探検服を着た白人の男性がしがみつき、望遠鏡で偵察をしている。

(第4図)「橋」(Brücke)。2頭のキリンが川の兩岸に座り、それぞれ川に向かって首を伸ばしている。2頭は首を川の上で突き合わせ、その首はひもで縛られている。首の上には板が敷かれ、3人の黒人がこの橋を渡っている。一人の黒人はこの橋から落下して川へ転落しつつあるが、川の中ではワニが大きな口を開けて落ちてくるのを待っている。

(第5図)「衛兵小屋」(Schilderhaus)。異動式衛兵小屋としても使えると説明され、キリンに大きな縞模様の布をかぶせ、前足部分のところを扉のようにあけて、番兵の勤務する衛兵小屋として描かれている。その入口の前に黒人の兵隊が銃を体の前に立てて、直立不動で立っている。右の後ろにもキリンの衛兵小屋と別の衛兵が小さく描かれているが、この衛兵は膝伸ばしの軍隊式歩行で移動していくところである。

(第6図)「目印」(Merkzeichen)。紐を結んでしるしをつけておくのと

同様に、一頭のキリンの長い首が一ひねりされて結ばれ、目印とされている。キリンの前の地面には商人風の黒人が座っている。何の説明もされていないが、勘定か日付等のメモ代わりにキリンの首をひねっておくのであろう。

(第7図)「川の渡し」(Flußübergang)。2頭のキリンを並べ、頭の上に長い板が渡してある。キリンは向こう岸からこちらの岸へと川の中を歩行し、水から頭だけを出している。この板の上には、子供を含めた5人の黒人が楽しそうに腰かけている。説明文ではこの渡しの運賃は、「ミュンヘン・ビルダーボーゲン」一枚買うのと同じぐらい安いそうである。ミュンヘン・ビルダーボーゲンには価格が印刷されていないが、同時期にシュトゥットガルトで発行されたGW社のビルダーボーゲンには「白黒1枚1グロッシェン、カラー2グロッシェン」と書いてあり、B&S社もほぼ同じ程度でなかったかと推定される。つまり現在の日本の通貨でほぼ数十円の安価なものであったようである。

(2) 「ストーリー・ビルダーボーゲン」

3-2-1 「姑とワニ」

O&R社では1888年にNROR-08635「姑(しゅうとめ)とワニ」(Die Schwiegermutter und das Krokodil)⁴⁵という作品を発行している。ドイツの植民地政策によってアフリカへの関心が高まったことを受けて、16コマの滑稽なストーリー漫画風作品である。マイアー氏は幸運にも宝くじに当たった。一家は5人のようで、マイアー夫妻と、すでに大人になっている息子と娘、それにこの作品の主人公となっている姑である。マイアー一家はまず家で当選を祝い(第1図、何本ものワインの瓶が並べられている)、この多額の金を何に使おうか相談して、旅行に行こうということでは全員

45 Hirte, Werner: *Die Schwiegermutter und das Krokodil*, Eulenspiegel Verlag, Berlin, 1970(2), S.29.

一致する（第2図）。息子はミュンヘンへ行ってビールを飲もうという（第3図）。娘はトルコがすばらしいところだという（第4図）。しかし老人の姑はピラミッドにファラオが住む所へ行きたいと主張する（第5図）。姑が言いだしたことには逆らえず、船でエジプトへ出かける（第6図）。5人はエジプトに着き、ロバに乗って陸地を進む。ここではカバに乗るものだとばかり思っていた娘は驚く（第7図）。しかしナイル川の岸にはワニがいて、そのワニは、あるいは単なる娯楽なのか、あるいは散歩療法のためなのか、歩きまわっている（第8図）。ワニは歌を歌ってマイアー氏一行に近付くが、この一行の先頭には姑がいる（第9図）。ワニは姑を見て「Veni, vidi, vici（ヴェニ・ヴィディ・ヴィチ、来た、見た、勝った）」と言う（第10図）。どうしてワニが姑を選んだのかは分からない。このワニは遠慮深いのか、目が悪いのか、のどちらかであろう（第11図）。姑はワニに遭遇してロバの上で驚いているが、ワニは熱い愛の喜びの涙を流し、胸の鼓動を高まらせた（第12図）。女性は命からがら逃げようとするが、ワニは愛情に燃えて姑を追いかける（第13図）。「待ちたまえ、いとしい人よ、止まらないなら、無理やり止めてみせる」とワニは叫び、姑は急いで逃げたが、ワニの愛の力が勝った（第14図）。姑は逆らったが、ワニは彼女を捉え、口に入れてしまった（第15図）。ワニは膨らんだ胸を叩いて、「なんと楽しいことか。脂の乗った姑は何とおいしいごちそうなことか」と言う。姑はワニに食べられてしまい、ワニの腹は丸々と膨らんでいる（第16図）。

ワニが人間の女性である「姑」に一目ぼれする、あるいはラテン語（シーザーの有名な言葉）をしゃべり、「熱い愛の喜びの涙」というロマン主義的な表現を持ち出すなど、きざつばいインテリ風の人間のように描き、凶暴な本質とのアンバランスによって滑稽さが生み出されている。しかしこのワニがいかに知的な精神を持っていようと、獐猛さには変わりなく、結局主人公を食い殺してしまう。図版で見る限り、家の中の様子も立派な家具が置かれており、服装からしてもマイアー一家は中流以上の裕福な家庭のようである。しかしある程度裕福であったとしても、宝くじに当たらな

ければ、おそらくアフリカ（エジプト）へ旅行に出かけることはなかったであろう。19世紀末において（新大陸への移住を別にすれば）ヨーロッパ圏外へ旅行に出かけるのは、通常の市民ではなく、軍人や、探検家、貿易の関係者がほとんどであったであろう。老人である「姑」がこれを言い出し、旅行隊列の先頭に立って進むのは、この人物がかなり新進の精神に富む進歩的な考えの持ち主であるからと思われる。ミュンヘンへ行ってビールを飲もうなどという俗物的で、ありきたりな考えの息子とは全く反対の性格である。しかしそのような新しい開拓精神には危険が伴うものである。主人公がワニに食い殺されるのはブラックユーモアのような結末である。それだけアフリカが危険であることをこの作品は主張したのであろうか。あるいは出しゃばりの女性を快く思っていない俗物人間の日ごろの溜飲を下げることを、俗物的読者に期待してこのような結末にしているのであろうか。いずれにしてもこの作品においては極端な結末にして人々を驚かせようとする制作意図が感じられる。

3-2-2 「人をあざ笑う悪者」

GK社が1889-90年に発行したNRGK-08827には一枚の用紙に上下4列の図画が配置され、それぞれの列に独立した物語が述べられている⁴⁶。(1)「ゲオルクの話」(Die Erzählung vom Georg, 4コマ)、(2)「動物をいじめる子供」(Der kleine Thierquäler, 3コマ)、(3)「言うことを聞かないと罰が下る」(Bestrafter Ungehorsam, 4コマ)、(4)「人をあざ笑う悪者」(Die bösen Spötter, 3コマ)である。この作品は1845年に出版されたハインリヒ・ホフマンの絵本『もじゃもじゃペーター』(Struwwelpeter)の模倣作品である。(1)はホフマンの「スープのカスパー」、(2)は「悪いフリードリヒの話」、(3)は「指吸いの話」、(4)「黒人になった話」である。ここでは人

46 BDNセンター資料 (B-2196-K)。なおこの作品については拙稿『キューン社の後期の文学的テキスト付きビルダーボーゲン』(前掲)、S.73頁以下も参照されたい。

種問題と関連する(4)のみについて簡単に述べておきたい。

NRGK-08827(4)「人をあざ笑う悪者」はわずか3コマの「ストーリー・ビルダーボーゲン」である。この作品では、路上で二人の白人少年が、傷痕軍人（軍服を着た白人男性であるが、右足が義足で松葉づえをついている）をあざ笑う（第1図）。するとサンタクローズの下僕であるループレヒトに子供たちは捕まり、大きなインク壺の中に浸けられてしまう（第2図）。黒い色は落ちず、悪い子供たちは真っ黒な姿になって、向こうへ逃げていく。傷痕軍人と別の一人の子供が指や手を突き出しながら、悪い子供の方を見ている（第3図）。テキストはそれぞれのコマに1連ずつ（合計3連）韻文で書かれている。

君たち悪い子供たちよ、人をあざ笑ってはいけない。
そんなことをすれば処罰されるのだ。
手足の不自由な人をあざければ、
厳しく処罰されるのだ。

この言葉も右から左の耳へ聞き流された。
だが処罰は免れることはできない。
ループレヒトはすぐさまインク壺に
悪い子供たちを入れた。

こうして悪い子供らが走って逃げる。
子供たちの気分は落ち込んだ。
みんなが子供たちに指をさす。
黒い色は落ちやしない。

ホフマンの作品では、歩いている黒人の子供を見て、その肌の黒いのをあざ笑った3人の少年が、聖ニコラウス（サンタクローズ）に黒いインク

壺に浸されて黒くされてしまい、黒人の子供よりも黒くなってしまう。ホフマン自身は主観的には黒人に対する差別意識を強く持っていたわけではなかろう。この作品では、黒人の肌が黒いのをあざ笑うのはよくないとされ、あざ笑った白人の子供が聖ニコラウスによって処罰をされるのである。ここまでは人種間の差別をなくそうとする態度であるので正しい発想である。しかしその処罰の内容が問題である。白人の子供を黒インクに浸して黒くするわけであるが、一見これは同じ黒い色になって、あざ笑われた人（黒人）の立場を考えてみよという意図で、人種間の平等の立場に立っているかのように見える。だがよく考えてみると、黒い色にするのが「罰則」として正しいのであろうか。悪いことをした人への「処罰」は罰金にしても実刑にしても、懲らしめのためにペナルティを課すのである。果たして黒い肌がペナルティなのであろうか。あざ笑うという行為に対して、それが悪いことであるという意味で処罰する点までは正しいが、その処罰の方法においては黒い肌が否定的なものであるという基準が用いられており、この意味ではホフマンの作品において人種差別的な問題点が示されているといえよう。

ところでキューン社のボーゲンで少年があざ笑った対象は、右足を義足にしている白人の大人の身体障害者（傷痍軍人）である。ホフマンの場合は、黒人をあざ笑ったので、悪い白人の子供たちが黒いインクにつけられるという論理性はある（もちろんそれは黒い色を否定的に見ているからであるが）。しかしGK社のボーゲンで、白人の身障者をからかうことと、その罰として黒い姿にされることとの関連性は存在しない。ここで少年たちが、黒い肌にされ、人から指をさされ、あざ笑われるという罰を受けるのは、黒い肌はみんなに笑われる劣ったものだという考えがあることを明白に示している。この意味でこのボーゲンは人種差別的な作品であるといえる。ホフマンの作品を無批判に模倣し、登場人物を黒人から身障者に代えて新しい作品を作ったつもりであろうが、人種差別という点では、より差別を拡大した悪例である。

3-2-3 「砂漠のピアノ」

MU-01098「砂漠のピアノ」(Das Klavier in der Wildnis, 1894年)⁴⁷は7コマの小さい図版からなるストーリー物である。舞台は水辺の砂漠で、土レンガでできたような小さな小屋があり、その小屋の外にヤシの木が1本あり、その木の下に黒いピアノが置かれている。説明文は韻文で9連あるが、第5・6連は第5図の、第8・9連は第7図の説明と考えられる。

(第1図) 白人の男性が感情を込めたポーズでピアノを演奏している。サルが4匹ヤシのまわりに集まって、ピアノの曲に聞き入っている。

(第2図) 男性が演奏を終えていなくなると、サルが一匹椅子に座り、ピアノを演奏する。残りの3匹のサルはピアノの上に座り、楽しそうな手振りをして聞いている。

(第3図) 突然、象がやってきて、ピアノの後ろで1頭が2本足で立ち、長い鼻をピアノの鍵盤の方へ伸ばした。サルたちは急いで逃げだした。後方にはさらに続いてやってくる2頭の象が小さく描かれている。

(第4図) 3頭の象が2本足で立ち、お互いに身体をすりよせながら、ピアノの前で珍しいものを見るように固まっている。説明文には「原始林にはこうしたもの(ピアノ)は木に実ったりしない」とある。

(第5図) 1頭の象がピアノの椅子に座り、前足でピアノを演奏している。他の2頭は画面の右にいて、聞き役であるが、1頭は2本足で立っており(説明では「象のワルツ」を踊っているとのことである)、もう1頭は後ろ脚の膝を投げ出して座っており、人間のようなしぐさである。説明文では演奏している象のセリフが書かれている。「みんなよく聞きな。僕はサルを見てどうしたらいいかわかったんだ。すばらしい曲を演奏するから、耳をとがらせてよくお聞き。」

(第6図) 説明では、『さあ3頭でギャロップダンスをしよう。』なんと

47 Münchener Bilderbogen, Nro.1098, Das Klavier in der Wildnis, Braun und Schneider, München.

すさまじい足踏み、どすどす、ぶつかる音。とうとうみんな粉々になった」とあり、図では、3頭の象が暴れその体の下でピアノがつぶされる様子が描かれている。

(第7図) 象たちは満足して帰って行ったが、音楽愛好者の男性はこの不幸な出来事にごっかりした。図では小屋の前にピアノがベチャンコになっており、男性はヤシの木にもたれて嘆いている様子。小屋の屋根に上ったサルたちがピアノの方を眺めており、右端に小さく逃げ去っていく象たちが描かれている。説明文の最後に「『同じようでも、月とすっぽんだ』と男性は昔の諺で嘆く。」⁴⁸

この作品はもちろん現実的な描写をしていない。まず象が2本足で人間のように立ちあがって行動している点で、現実的ではなく、動物を擬人化したフィクションだということが明白であるが、その象が前足の指でピアノの鍵盤をたたいて曲を弾くことなど、鍵盤の大きさからしてとうてい不可能なことであろう。サルの指は人間と同じように動きはするが、もちろん野生のサルが人間のように楽曲を弾くことなどはあり得ないであろう。この作品はこうした野生の動物たちが人間のように振舞うことで滑稽な姿を見せ、読者を楽しませたいのであろう。しかし直接的に問題点として示されているわけではないが、ここでは白人の文化的優越（ピアノ演奏）と野蛮なアフリカが対比されていると考えることはできないであろうか。登場するのはこの作品では野生動物であるが、この象をアフリカ人の野蛮さを象徴的に示すものと見なすこともできよう。象たちは2本足で立ったり、野蛮なダンスを踊ったりして、擬人化されて扱われている点にも注目すべきではないかと思われる。

48 ここで述べられている諺は、Wenn zwei das Gleiche tun, ist es noch lange nicht dasselbe というもので、直訳すれば、「二人は同じようなことを行ってはいるが、まだまだ全く同じというにはほど遠い」という意味で、見かけはよく似ているが質的には大きな違いがあるという時に使うものである。

3-2-4 「ワニの王様カイマン」

NRGK-09846 「ワニの王様カイマン」(Der Krokodilkönig Kaiman, 1905-10年)⁴⁹もアフリカのナイル川を舞台にしたストーリーものの作品である。9コマの小さい絵があるが、説明は散文で、タイトルの下に序文風の説明があり、その後は、それぞれの絵の下に文が付けられている(以下、斜字体は説明文、カッコの中は絵の概要説明である)。

(序) ワニの王様カイマンの国は、ナイル川とその岸の砂漠で、王の周りには忠実な家臣たちが集まっていた。それは、カバ、サル、ライオン、雌ライオン、ダチョウであった。

(第1図) ワニの王様カイマンはご機嫌斜めだ。それは昼ごはんがちっともおいしくなかったからだ。それで王はムクドリに使いをやり、楽しい話を聞かせるように伝えた。ムクドリはやってきて、語った、「偉大な王、カイマン様、お食事がおいしくなかったとのことですが、私は魚や人間の肉よりも、ずっとおいしいものを知っています。あなたはまだホロホロ鳥の味をお試しになったことがありません。これはあなたの胃袋にとっても良いに違いありません。」(ナイル川の岸と思われる大地が描かれ、画面の左手前にワニがおり、口を開いて何か語っているようである。画面の後方には家来のカバ、サル、ライオン、ダチョウ、ヘビなどがワニの話をかしくまっていた様子である。)

(第2図) 王は言った、「それではホロホロ鳥を所望する。」しかしこれを捕まえるのはたいへん困難であった。この鳥はたいへん臆病ですぐに逃げってしまうからである。いつもはかなり抜けているが、時々すばらしいことを思いつくカバが言った、「私に良い考えがあります。カイマン王様、あなたは死んだふりをするのです。するとお悔やみを言うために、必ずホロホロ鳥はやってくるでしょう。」(画面は第1図とほ

49 Hirte, *Schwiegermutter...*, a.a.O., S.60.

とんど同じである。ただしワニの手前に、小さな鳥の姿が付け加えられており、この鳥は王に向かって話をしているようである。)

(第3図)「それではわしは死んだふりをするぞ」、と王は言って、砂の上に横たわった。役所は、王の死を国中に知らせるように、ムクドリに依頼した。ムクドリがやってくると、ホロホロ鳥は家族を連れて逃げようとした。(画面は変わって、ホロホロ鳥の住んでいる森の中である。ムクドリが使者として到着し、臆病なホロホロ鳥たちはあわてて逃げ出す様子をしている。)

(第4図)そこでムクドリは呼び止めて、全身の力をこめて叫んだ、「待ってくれ、ホロホロ鳥よ。カイマン王が亡くなったのだ。君は、家族とともに、宮廷へ行き、お悔やみを言わねばならない。」(第3図と同じ場面であるが、画面左手にムクドリ、右手に1羽のホロホロ鳥が描かれ、話をしている。)

(第5図)しかしホロホロ鳥はこれを不審に思い、「私がまず行って、恐ろしい王様が亡くなったのを確かめましょう。それから家族たちをお悔やみに呼び寄せます。」ホロホロ鳥は家族たちに別れを告げ、ムクドリとともに出発した。(第3図と同じ背景であるが、画面手前右側に父親のホロホロ鳥が左向きに顔を向け、画面の左側と後方に合計8羽のホロホロ鳥がいて、父親の言うことを聞いている。)

(第6図)ホロホロ鳥が到着したとき、ワニの王カイマンの体はびくりともせず、砂の上にながながと横たわっていた。そこにはダチョウ、ライオン、サルにペリカンまで、すべての動物がいて、大いに悲しんでいる様子だった。ホロホロ鳥は言った、「王様の死が、地震や砂嵐、その他の強力な自然現象を伴わなかったことは、私には理解できません。」(第1図と同じナイル川のほとりである。手前にワニが目をつぶって横たわり、死んでいる様子である。画面手前右端にホロホロ鳥がいて、ワニの顔を覗き込むようにしている。ワニの後方には第1図の家来たちが勢ぞろいして王の死を悲しみ泣いている。)

(第7図) (ホロホロ鳥) 「王様が死ぬ時には、何か奇跡が起こるはずで
す。これまで何も起こっていないとすれば、これから何か特別なこと
が起こるはずで。そうでなければ王様は本当には死んでいないので
す。」 「いったい何が起こるのだ？」 とカバが聞いた。抜け目のないホ
ロホロ鳥は言った、「しっかり見たまえ、これから奇跡が起こる。私
が、死んだ王様よ、しっぽを動かさなさいという、王様はそうする
のだ。」 すると何ということか、死んだカイマンは本当にしっぽを動か
した。(第6図と同じであるが、死んだワニがしっぽを大きく振り上げ
ている。)

(8) ホロホロ鳥は言った、「ご覧になったか、私の言うとおりであった。
さあ、しっかり見たまえ、さらに奇跡が起こるのだ。」 そしてホロホロ
鳥は声を張りあげて言った。「死んだ王様よ、足を動かしたまえ。」 す
ると本当に王のカイマンは足を動かした。ホロホロ鳥は言った、「さあ
見たまえ、最大の奇跡が始まるよ。」 ホロホロ鳥はすでに適度な距離を
取った後、命じた、「死んだ王様よ、あなたが本当に死んでいるなら、
口と目を開けたまえ。」 すると本当に、カイマン王は口と目を開けた。
だがその眼で見たものは、ホロホロ鳥がすでに遠くにいることであっ
た。(第6図と同じ場面。ワニは目と口を大きく開けている。ホロホロ
鳥はすでに画面右端奥へ飛んで逃げている。)

(9) ホロホロ鳥は翼を力の限りはばたかせて急いで飛び去っていった。
「死んだ国王カイマンよ、あなたが私の姿も、私の家族たちの姿も見
ることは2度とないでしょう」とホロホロ鳥は空中で叫び、姿を消した。
ライオン、ダチョウ、カバ、サル、そしてペリカンは驚いて、その後
ろ姿を見送った。ワニの王カイマンは自分の愚かさに腹を立て、怒っ
てナイル川に潜り込み、ただ尻尾だけを外に出していた。(川の水面が
描かれ、ワニは体を水の中へ潜らせ、尻尾だけが川の上に突き出され
ている。)

権力者のワニと、臆病だが知恵を働かせてこのワニをやり込める賢いホロホロ鳥を主人公とした動物寓話である。ここでは肌の色も文化の優越も問題になっておらず、一般的な権力者の横暴と庶民の対抗とをテーマにした痛快な物語と考えることができる⁵⁰。

3-2-5 「新しいタイヤ」

NRGK-09850「新しいタイヤ」(Der neue Radreifen)⁵¹は1905-10年の発行である。9コマのストーリーものの構成である。それぞれのコマの下に散文で次のような説明がある(斜字体は説明文、カッコの中は図版の説明)。

(第1図) 著名な冒険旅行家のアウグスティンは、自転車で中央アフリカの知られざる地域を走り回っていたが、昼の休憩にヤシの木の下に寝転んでいた。彼が眠りこむと、すぐに二人の黒人がその場所に近付いてきた。(ヤシの木に自転車が立てかけてある。ナイフを腰に下げた黒人の男性が二人、画面の手前に大きく描かれ、その自転車に近づくところである。左奥の木の陰の草むらに寝ている人物が小さく描かれている。)

(第2図) 二人は見知らぬ乗り物を調べ上げ、良い考えを思いついた。彼らはナイフで自転車からゴムのタイヤを切り取った。(二人の黒人が自転車に手をかけ、調べている。)

(第3図) これはすてきなおもちゃになった。そして、アウグスティンがヤシの木陰で安らかに眠っている間に、砂漠でタイヤを転がすことが、黒人の人々にとってたいへん面白い遊びとなった。(画面の左側で

50 この作品については、拙稿「キューン社の後期の文学的テキスト付ビルダーボーゲン」、関西大学『独逸文学』第56号、2012年、85頁以下でも論じたことがあるので、参照されたい。

51 Riedel, Lisa und Hirte, Werner: *Die schöne Kartenlegerin*, Eulenspiegel Verlag, Berlin, 1984, S.12.

奥へ逃げていく二人の黒人が描かれているが、彼らは自転車の車輪を転がしながら走っている。画面の手前のヤシの木の下には車輪を取られ、フレームと針金だけになった自転車が放置されている。）

(第4図) シュルシュルという音で、冒険旅行家が目を覚ますと、自分の上に大きな蛇(ボア・コンストリクタ)がいるのが見えた。／蛇はちょうどアウグスティンの所へ下りてくるところだった。(ヤシの木の下で白人男性が寝ている。木の上からは大蛇が首を伸ばし、男性の上で大きな口を開いている。)

(第5図) たいへん冷静に、アウグスティンはすばやく拳銃を取り出して、蛇の頭を撃ち抜いた。(左手に持った拳銃を白人男性は発射させ、その弾丸がヘビの頭に命中した瞬間が描かれている。ヘビの頭は発砲した拳銃の火に包まれている。)

(第6図) この死んだ怪物の重みで、ヤシの木は傾いた。アウグスティンはここに滞在するのは快適ではないと考え、他へ走ろうと思った。このときがたがたにされた自転車をみて、アウグスティンは驚いた。(ヘビの胴体はまだヤシの木に巻きついたままである。アウグスティンは立ちあがっているが、針金だけになった自転車をみてびっくりしている。)

(第7図) アウグスティンは自分で切り抜けることを心得た男だったので、すばやく考えを巡らせて、死んだ蛇の体を木から引き下ろした。新しいタイヤを作るためだった。(ヤシの木に絡まった大蛇の胴体を、アウグスティンは両手で引っ張って、引き下ろそうとしている。)

(第8図) アウグスティンは蛇の体を二つに切り、それぞれを丸く曲げ、それをたいへん巧みに自転車のワイアスポークに刺した。(アウグスティンはヘビの胴体を切り、丸く車輪の形にして、自転車のタイヤにしようとしている。)

(第9図) ここに自転車は修復された。前よりも良くなり、役に立つものとなった。蛇のタイヤは、どんなゴムだけのタイヤよりも弾力性が

あった。そしてアウグスティンは誇らしく楽しい気分で旅を続けた。
(自転車アウグスティンはアフリカの草原を走っている。タイヤはヘビの模様が入っているが、きれいな円形でうまく回転しているようである。)

黒人たちがタイヤを奪っても、これに対抗処置として報復するのではなく、機転を利かせて大蛇の体をタイヤにしてアフリカの大地を走るアウグスティンは立派な冒険家としてここに描写されている。もちろんこれはフィクションであるから、実際にはそんなにうまく大蛇をタイヤにすることなどはできないであろう。アフリカの大冒険の雰囲気ドイツの読者に伝えようとする作品であると考えられる。ところでここで登場する黒人の扱いはどうであろうか。まず、ナイフを持ち、人の所有物を勝手に壊して車輪を盗む危険な犯罪者として描かれている。また、「野蛮な」アフリカ人は自転車が何かを知らず、子供の車輪遊びのおもちゃとしてしか使わない、無知で幼稚な人物として描かれている。この作品もアフリカが危険なところであるという点と、アフリカ人が野蛮で、無知で、幼稚であり、「文化」や「近代技術」を知らないことを強調しているのではないだろうか。勇敢で立派な白人の冒険家を讃えるということは、逆の面からみれば、アフリカの住民への蔑視と嘲笑を含んでいると考えることができよう。

おわりに

本稿では中近東とアフリカが登場するビルダーボーゲンの中で重要と思われる作品を取り上げた。このほかにも人種問題と関連するビルダーボーゲンには、(1)ドイツ国内のユダヤ人問題に関連する作品、(2)東アジア、特に日本などが扱われている作品もある。これらについては論じるべき観点も多岐にわたるので、これらの作品についての究明は別の機会に譲りたい。本稿で論じたことをテーゼ風にまとめておきたい。

(1)人種問題に関連した戦争や反乱などの時事的な報道は、ノイルピーンのGK社、O&R社のビルダーボーゲンに数多くみられるが、その報道姿勢の特徴は、(a)描写は、印刷会社の図案担当者が実際に取材して描いたものではなく、新聞や絵入り雑誌などから素材を借用し、画家の想像で「創作」したものがほとんどである、(b)ドイツ軍が直接関与しない戦争・戦闘においては、概して客観的な描写であるが、戦闘場面をセンセーショナルに扱って、読者の関心を引き、販売を促進しようとする意図が感じられる、(c)ドイツ軍がかかわる戦闘に関しては、一方的にドイツ軍の側からの報道に終始し、本質的にドイツ植民地主義政策の宣伝物となっている、(d)初期においては奴隷制に反対し、虐げられた黒人に同情を示す、人道主義的な報道もある。

(2)娯楽的な内容の作品について、全般的に次のような特徴が上げられよう。(a)日常的・常識的な世界とは異なるフィクションの材料として、アフリカの珍しい風景や、動物、人々の様子は好んでビルダーボーゲンに取り入れられた、(b)その際の作者の基本的な観点は、アフリカの状況を危険、野蛮、未開さを強調しているもので、それらを「文化的水準」の高いドイツ(ヨーロッパ)と比較し滑稽化することで笑いを獲得しようとしている、(c)黒い肌や単純な行動を初めから劣ったものと見なす人種差別的な作品も散見される、(d)しかし中にはアフリカの事情に適合しないドイツ式の生活スタイルを持ちこむことの滑稽さを示し、ドイツの植民地主義政策(西洋「文化」の弊害)に対して疑問を投げかけるような作品もある。

(3)クリミア戦争で注目されたトルコ関連の作品については、戦闘の状況を描く時事的作品においては、ドイツは戦争の当事者でなかったためか、比較的中立的な立場で描いているが、トルコのハーレムなどを描く作品においては、興味本位な点があるにしても、古いアジア的女性支配の問題が批判的に描かれていて、歴史的な家族観の問題として興味深い資料を提供している。